
心を垣間見る者

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心を垣間見る者

【Nコード】

N6159C

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

今、世界はたった一人の超一級犯罪者により荒れていた。青年の名前は柊翔^{しゅくしやう}。日本で数々の犯罪を繰り返し、今やその名を知らぬ者はいないという超一級の犯罪者である。柊が、数々の犯行を繰り返しさらに全てにおいて逃げ切っていることは事実で柊は人の心をすばやく見極めるという意味から世間からあるコードネームで呼ばれていた。それは。ハート・グランス。”ハンス”と。

プロローグ（前書き）

結城陸空初作品です。テーマは『心』です。全三十二話＋。最後
まで楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

『死にたい』

自分の中で、そう思うようになったのは、幼い頃だった。

自分で自分の能力に気が付いたのは、まだ幼い時。

まだ幼い時にはいた友達と遊んでいたとき、俺だけが友達の『心を読むこと』が出来ることに気が付いた。つまり、人が心の中で考えていることが分かるのだ。小さい頃はみんなそうだと思っていた。それが当たり前なんだと。

でも、それは少しも普通なことではなく、俺の全てを 否定するには十分な理由だった。

いつも一緒に遊んでいた友達の親に言われた一言……。

「あの子は普通じゃないから、一緒に遊んじゃ駄目よ」

親からすれば、自分の子供を心配する当然の発言だったのかも知れない。でも俺にとっては、それは自分の存在の否定以外の何ものでもない言葉だった。

まだ幼かった俺達は、親に言われた通りにする。だから親の言うことを聞き友達はどんどん俺から離れていった。

親も……同じだった。いや、友達の親以上に俺を嫌っていた。

親は俺が言葉を話すようになった辺りから違和感を感じていたようだ。無理もない。毎日一緒に生活をしているんだ。気が付かないわけがない。最初は、物分りのいい子だと思われていたらしい。自分達がなにかを言わなくても俺が親の考える行動をしていたから。でも少しずつ、でも確実に俺の能力に気が付いていった。

気が付いてからは酷いもの。虐待などは受けなかった。なぜなら俺に近寄ろうともしないから。あの目は、人間を、自分の子供を見る目じゃない。そして俺は捨てられ、施設に拾われた。普通の人と違うものは、迫害される。人として扱われることもない。『化け物』という言葉はまさに俺のためにあるようなもの。

ならば　それでいいじゃないか。

俺は、一生を『化け物』として生きていく。

そして、俺を必要としないこの腐りきった世界を滅ぼしてしまえばいい。

それが、『死ぬ』ことに繋がるのだから。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。最後までお付き合いいただけると幸いです。

第一話 超一級犯罪者（前書き）

本日より二日に一度、一話ずつUPしていきます。完結は10月16日になります。それでは第一話よろしくお願いいたします。

第一話 超一級犯罪者

空には己の姿を半分以上隠し、それでも輝き目立っている三日月が静かに現れていた。

その遙か階下では、今日も激しいサイレンの音がやむこともなく夜の暗闇の静けさをにぎやかにするのに最適だった。

何台ものパトカーがただ一つの建物を囲んでいる。いや、包囲しているという表現のほうが正しいだろう。包囲されている辺りはより一層騒がしくとても夜の雰囲気は存在しない。

パトカーに乗っていた警察という部隊は建物に向かい大声で叫んでいる。その言葉はただ一人の人間に向けられた言葉だった。

突然建物の扉が静かに開く。

そこから、外の荒けさとは比べ物にならないほどに静かで静寂という言葉が似合いそうな青年が一人出てきた。

青年の口元は両端の先端が少し上を向いている。要約すると少しだけ笑っている。

全身は黒いハードスーツのようなものを着てとても動きやすそうだ。手には大きく膨れたかばんを持っている。

警察は、青年の姿を確認すると一斉に拳銃を抜き、青年に銃口を向けた。青年のほうには数え切れないほどの警察とそれに伴う銃口が向けられていた。

青年が出てきた建物には正面に朝銀行と書かれている。

『柊翔！ 貴様を爆弾テロ！ 強盗！ 殺人！ 以下多数の罪により逮捕する！ 大人しく投降しろ！』

スピーカー越しに聴こえてくるその声は当然青年の耳にも届いているだろう。どうやら銀行という場所から察するに青年は今し方銀行強盗を働いて出てきたようだ。つまりかばんの中身は現金といったところだろう。

すると突然青年は手に持っている大きく膨らんだかばんを前に差し出した。

そして次に青年は、かばんを持っていないほうの手でポケットから小さなビンを取り出した。青年はそのビンを器用に片手であけると中に入っている液体をかばんに満遍なくかかるようにかけた。

かけ終わると青年はビンを前へと投げ捨てた。

その行動の一部始終を警察は疑問符を浮かべながら静かに見ていた。青年の不思議な行動の意味が分からずただ見ているしかなかったのだ。

青年は再びポケットへと手を入れる。次に取り出したのはライターだった。

そして、青年はおもむろにライターに火を点し、かばんにその火を乗り移させた。かばんは見る見る燃えていく。青年が先ほどかけた液体はガソリンだったようだ。かばんにつけられた火はやがて激

しさを増していき、青年は持っているのを不可能と感じたのか、かばんを地面に投げ捨てた。

地面に投げられたかばんはどんどん激しさを増し燃えている。

すると一枚の紙のようなものがかばんの中から舞った。それはすでに黒こげで識別不可能に近かったがそれがなんであるかは容易に想像できた。

それは、かばんの中に入っていた大量の現金だった。

かばんと共に踊るように燃える炎はかばんの中にある現金までもを地獄の業火で次から次へと炭へと変化させていった。

警察はその光景に驚きを隠せないでいる。無理もない。今さっき強奪された現金を今、目の前ですべて燃やされているのだ。青年はその警察の隙を逃しはしなかった。

途端に青年は、ポケットから丸い石ころのようなものを出すとそれを警察がいるほうに向かって投げつけた。それは地面に着弾すると同時に小さな爆発を起こし大量の煙を出す。警察はその突然の出来事に対応できず目を覆う。

大量の煙を掻い潜り煙の外に出た警察が見たものは青年の姿ではなかった。そこには青年の姿はなく変わりに大きな黒い箱が入り口の前に置かれていた。箱の上部にはデジタルの時計のようなものが表示されていた。

そしてそれは確実に時を刻んでいる。

それは、時限爆弾だった。

爆発までの残り時間 00:01秒。

警察がそれに気が付き全員を退避させることは完全に不可能な時間だった。

タイムリミット 。

一瞬の激しい閃光と共に辺り一面は火の海と化し、爆音と爆風に辺りの建物は軋み、崩れ、そして人間は吹き飛び、燃え、蒸発し、その場は一瞬にして地獄絵図と化した。

一番近くにあった朝銀行は土台をやられ崩れ落ちていく。

辺りに再び静寂が戻ったときそこは一部の建物崩壊と大量の負傷者と大量の死者に囲まれた朽ち果てた地獄の一丁目と呼ぶに相応しい場所になっていた。

今、世界はたった一人の超一級犯罪者により荒れていた。

青年の名前は柊翔^{ひろと}。日本で数々の犯罪を繰り返し、今やその名を知らぬ者はいないという超一級の犯罪者である。柊はまさに神出鬼没で犯行の手口は大胆不敵。さらに犯罪の目的も分からないという。

しかし、柊は真実かどうかは分からないが『人の心が読める』という噂が立っていた。というのもそれは柊自身が中継テレビに向かって言っていたことから始まる。当然そんなことを信じることは出

来ないのが普通である。

しかし柊が、数々の犯行を繰り返さらに全てにおいて逃げ切っていることは事実で柊は人の心をすばやく見極めるという意味から世間からあるコードネームで呼ばれていた。それはハート・ゲラン
ス。

” ハンス ” と 。

第一話 超一級犯罪者（後書き）

読んでいただきありがとうございます。次回UPまでお待ちいただけますと幸いです。

第二話 出会い

『昨晚、朝銀行にて事件がありました。警察の話では犯行は”ハンス”の仕業と見られています。昨晚ハンスが犯した容疑は、強盗、爆発物所持です。またハンスが所持していた爆弾が爆発し、警察関係者や銀行職員、周りにいた人達が巻き込まれ多数の死傷者が出ています。またハンスは強盗した現金をその場で燃やすという謎の行動を起こしており、現在は逃走中で行方は不明です。日本政府は異例の全国指名手配だけではなくハンスの行方について有力な情報を提供してくださったかたには賞金を出すつもりようです。またこれが昨日死亡した人達の名前です』

そう言つてテレビの画面は死亡者の名前の表示に切り替わつた。死亡しているのはほとんどは警察関係者で一部に銀行職員や一般市民の名前がある。

「うわっ、凄いたくさんの人が死んだんだね。世の中物騒だなあ。しかもこの場所家から結構近いじゃん」

それを言つたのは一人の女性だった。女性はオレンジジュースを片手にソファアに座りながらテレビを見ていた。

女性の身なりは小柄で身長は150cmほどだろうか、髪はストリートのセミロングで肩より少し長めで茶髪に染まっている。

「葵^{あおい}！ そんなところでくつろいでないではやく支度しなさい」

それを言つたのは後ろの台所で洗い物をしている葵と呼ばれた女性の母親だった。

「はい」

葵は少しだけめんどくさそうな声で返事をし、コップを洗い物をしている母親の元に持っていき部屋を出て二階へ上がっていった。

彼女達はこれから病気で入院している祖父の病院へ見舞いに行くようだ。彼女の祖父は三ヶ月前に末期の肺がんだと診断された。その後容態は次第に悪くなりもう家には帰れないだろうと言われていた。肺がんでうまく酸素を供給することができないので現在は酸素マスクをつけて入院生活を送っている。

葵は自分の部屋で服を着替える。

彼女の服装は結構カジュアルでなかなかセンスが良い。アクセサリーも多少身に着けまるでデートにでもいくかのようだ。デートといえば葵には彼氏はいない。半年前に彼氏と別れて以来、特に出会いもなくそのまま現在に至る。

葵は着替えた後、今度は薄化粧を始めた。そして準備が整うと一階へと降り母親のいる部屋へと行く。母親も洗い物を終え、自らの準備も終盤を迎えていた。葵は母親の準備が整うまで再びリビングへと行きテレビをつける。現在はニュースも終わりなにかしらのバラエティー番組をやっている。

ソファーに座りながら、葵はバラエティー番組を見ている。そうこうしているうちに母親の準備も整ったようで母親が葵を呼ぶ。葵はその声に反応してテレビを消し玄関へと向かった。

玄関へ行くと葵はスニーカーを履き外へ出る。

外は昨日から続いている晴天に輝いている。そして葵は車へと向かう。車の運転をするのは母親のようだ。しかし葵も運転は出来る。今回はたまたま母親が運転するだけだ。車は家の駐車場から出て道路へと移動する。

葵はその時あることに気が付いた。

この道を通って病院に行くということは昨晚あった事件現場のすぐ近くを通ることになる。葵は半分以上興味本位で現場を直接見てみたいと思っていた。葵はそのことを母親に話すと母親は少しだけならと葵の要望を受け入れてくれた。

車はなんの変哲もなく道なりに進んでいたが、しばらく進むとたくさんの人がざわめきと共に姿を現した。かなりの人がいて車ですら通ることができないようだ。よく見ると警察のような人も数人いる。ここは昨日事件が起きた現場の近くだ。

葵と母親はもしかして通行止めになっているのではないかと思いつつ一度車を停めた。すると警察の一人が葵達の車に気が付き寄ってくる。

「すみません、危険ですのでここは通行禁止になってます。あちらの道から迂回してください」

そう言いながら警察の人は道の端を指さした。警察の人が指さしたほうからいけば確かに迂回していつもの道に帰ることが出来る。とは言え事件現場を見に行きたかった葵にとって、そちらのほうに行くと言うことは事件現場にはいけないということになり残念そうだった。どちらにしてもあの様子では立ち入り禁止になっているだ

ろうが。

仕方なく葵を乗せた車は道を迂回して病院に行くことになった。

さらにしばらく走り家から30分ほどで病院へと着いた。葵と母親は車から降り、受付を通って病室へと向かう。

割かし大きな病院は、見た目が大学のような綺麗な病院だ。都会にあるのも手伝い入院していたり、診察にきたりする人も多く、さらに医療設備や環境も整っているしつかりとした病院だ。どこを見渡しても患者やお見舞いにきた人達の姿が目に入る。

この病院でも昨日の事件で入院している患者などがいるのか報道陣の姿もチラホラ見ることが出来る。昨日の事件が起きた後この病院も大変だったのだろうか。そんなことを思いながら葵は三階にある病室へとエレベーターに乗り向かう。

葵は昨日の事件を身近に感じていた。家の近くで起き、その事件で怪我をした人達が今いる病院にいる。他のあまり関心を持たない完全に無関係の事件とは違う。直接関係はないがすぐ近くで起きた事件なのだ。葵はそう思うたびにある思いが頭をかすめては消えていた。

それは事件を起こした張本人、通称”ハンス”と呼ばれる男。その男は一体どんな男なのか。一体なんの目的でこれほどの事件を起こしているのか。たくさんの人が死に怪我をし、大変な目に合っている。それでも葵は少しその人物に会いたくなっていた。

三階に着いた葵達はまっすぐ病室へと向かう。病室へ着くとスライド式のドアを開け中へ入る。葵の祖父は重病患者であるため現在

は個室で部屋へ入ると心電図の機械の音と酸素マスクへ送る酸素を作っている機械の音だけが静かに響いていた。その病室は昨日起きた事件など知る由もなしというように静かにひっそりとそこにあった。

「おじいちゃん、来たよ！」

葵の元気な声が静かだった部屋の中を飛び交う。その澄んだ声は確かに祖父の耳に届いたようで、祖父は喋ることが出来ないものの目を開け、微かに微笑んで見えた。葵の祖父は肺癌ですでに末期だと診断され、病状が悪化してから酸素マスクを着けほとんど話すことも出来なくなっていた。葵はもう何ヶ月も祖父の声を聞いていない。

葵の祖父は元気だった頃は実によく喋る人だった。葵もそんな祖父の影響を受け、今の性格が作られているようなものだ。祖父に似ることを、隔世遺伝と呼ぶらしいが葵の元気な性格もその類だろう。葵の知識のほとんどはよく話し、なんでも教えてくれた祖父によるものが大半を占めていた。それだけに今の話すことがほとんど出来ないほどに弱った祖父を見ると葵はどうしようもなく悲しい気持ちに胸を締め付けられていた。加えて末期の癌。もう先も長くは無い。葵の気持ちはまるで深い奈落の底に落ちていくような気がしていた。

「葵、悪いけど飲み物買ってきてくれない？」

母親の声に葵はハツとする。ずっと無意識的に祖父の姿を見ていた葵はその声に半ば驚き母親の顔を見た。

「え、ジュース？ うん、いいよ。なにがいい？」

葵はボーとしていたことを隠すように必死に話を繋げようとする。

「私は冷たいコーヒーでいいよ。はい、お金」

そう言いながら母親は財布から自分の分と葵の分の小銭を取り出し葵に手渡した。葵はそれを受け取ると静かに病室を出て行った。自動販売機は三階に一つある休憩室にあった。

休憩室はお見舞いにきた人などが気分転換によく利用するためか机や椅子はもちろん自動販売機やテレビ、雑誌なども置かれている。窓の外は軽くベランダになっており出ることも出来る。

いつもは休憩室は人が多いのだが、昨日の事件もあってなのか人は一人もおらず葵はきょとんとした顔でジュースを買った。ジュースを買った葵は休憩室の椅子に座り自ら買ったジュースを飲みはじめた。窓の外を見ると都会の景色が見える。どこにでもあるビル群やマンション、民家、デパートなど。ここが都会の中心にあるというのを容易に感じさせることの出来る風景だ。

とその時。

ふと影が見えた。葵はそれを確認するために椅子から立ち上がり窓へと近づく。窓から左右を見るがなにもない。葵はユウレイでも見たのではないかと一瞬鳥肌が立ち身震いがした。だが次の瞬間それはユウレイではなく、また見間違いでもないことに気が付く。

窓の外にある小さいが確かにあるベランダ。そこにどこからともなく降り立った一人の青年。葵はその青年を見て……いや、目を離すことなんて出来なかった。それはほかの誰でもない。

昨日事件を起こした張本人であり、世界的大犯罪者”ハンス”であつた。

葵も、そしてこの世のほとんど人間が知るであろう人間、”ハンス”。いや、人間であるかも疑わしいその存在。それが今、自分の目の前に突如現れた。

ハンスも葵の存在に気が付き、お互いに視線が合った。葵はその眼を逸らすことも出来ずにただハンスを見つめる。

今、この場はまるで時間が停止しているかのように二人は微動だにしない。

それでも二人の運命の歯車はその時を^{とき}確実に刻んでいた。

第二話 出会い（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございます。細心の注意をはらってますが万が一、誤字などがありましたら教えて頂けると助かります。

第三話 垣間見る能力

病院の一室の休憩室 。

そこにはハンスと葵の二人だけが存在していた。お互いがお互いに眼を離さずまるで蛇に睨まれたカエルのように身動き一つ取れなくなっていた。

「…………おまえ」

身動きも取れず沈黙を保っていた空間に声が木霊する。それは紛れもないハンスの声だった。その声に身体金の縛りが溶けた葵はハンスから眼を一瞬逸らしたが、またすぐに眼をハンスに戻した。

見るとハンスは窓から病院内に入ろうとしているように窓の取っ手の所に足を駆けていた。

「あなた…………もしかして、ハンス？」

ハンスが先になにかを言おうとしていたが、葵はそこまで頭が回らずに頭に思いつくままの言葉を放つ。その質問にハンスも自分が言おうとしていたことを止めて答える。

「ハンスっていうのは世間が勝手に付けた名前だよ。俺の名前は、
柊 翔。この世で最も翔ぶことの出来る人間だよ」

人間。

確かに人間なのだろう。見た目は若い青年にしか見えない。特に

変わったところもない極普通の青年。でも普段危険なこととは無縁な人間でも一瞬で分かる。ハンスが放つ殺気にも似た気配。独特の雰囲気。その場にいるだけで空気が変わり、その空気は己を締め付ける。ただそこにいるだけで苦しくなる。これが恐怖。

葵は無意識の内に手は震え、鳥肌を立てていた。きっと普通の人間なら誰でもこういう反応を起こすのだろう。なにせ今日の前にいるのは世界的大犯罪者なのだから。

「おまえ、俺の能力知^{ちから}ってるか？」

葵はその言葉にまたもやハツとした。

ハンスの能力も有名である。ただそれが嘘かホントかは誰にも分からない。いや、それ以前にハンスの能力自体を信じる人は極めて少ない。それもそのはずである。ハンスの能力それ自体がまさに人知を超えている能力だからである。

ハンスの能力。それは人の心を垣間見ることが出来る。つまり人の心が読める。

今自分が考えていることも全て筒抜けなのだろうか。葵は時間と共に少し冷静になっていく自分を感じながらそんなことを考えていたのだが、ハンスの答えは予想外のものだった。

「俺は人の心を読むことが出来る。だが……おまえの心は読めない」
「え？」

葵は驚いた。心が読めない。それはつまり垣間見ることが出来ない

い。

それは、ハンスにとって自分の能力が嘘だと示すことになるのではないだろうか？ ただでさえハンスの能力を信じてる人自体少ない。それもちろん人知を超えているし、実際に見ていないし、経験していないからである。だが、だからこそ、たとえそれが嘘であっても、接触した人間には心が読めると言っておいたほうが都合がいい。

それなのにハンスは葵に対して心が読めないことをあつさり認めた。これは一体どういうことなのか。

「俺がいままで会った人間で、心が読めない人間はおまえが初めてだ」

つまりハンスが言うのは心の読めない人間に出会うのは始めてということ。

葵はもともとハンスの能力に関しては信じてはいなかった。だから、心が読めないのは当然だし、なんら不思議ではない。それが当たり前なのだ。自分が特別なんじゃない。葵はそう心に言い聞かせてハンスを見つめた。

「少し……おまえに興味が湧いた。名前は？」

葵はハンスに名前を聞かれたことに驚いた。しかも自分に興味が湧いたなどとは、世界的大犯罪者に注目されているということだろうか？ もし、ここにハンスがいることが知れたら大パニックになるだろうし、自分がハンスに会ったことが知れば警察などが挙げて聞きにくるかもしれない。葵は少しだけそんな不安を感じることが出来るくらい冷静さを取り戻していた。

だからこそ、多少の沈黙はあったもののハンスのその質問にも答えることが出来た。

「……葵」

「葵……か。いい名前だな」

そう言つとハンスは再び窓からベランダへと身を乗り出した。

「もう少し話して居たかったが、お前の母親が来たようだ。また、会いに来るよ」

ハンスはそれを言い終わるとほぼ同時に再びベランダから姿を消した。葵にはさらに上の階に飛び移ったかのように見えたがその真相は分からない。なぜなら葵がそれを確かめようとした時、後ろから葵を呼ぶ声が聞こえたからだ。

第三話 垣間見る能力（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。引き続きよろしくお
願いします。

第四話 聴取

葵の祖父のいる病室の窓からはちょうど病院の正面が見える。正面のほうには大きな駐車場があり、見舞いに来る車などで溢れていた。そんな中、一般の人とは違う車が数台停まっていた。

それは白と黒の色彩が特徴的で赤いランプを回しているパトカーと呼ばれる乗り物だった。

だが、彼らは決して昨日の事件のことで来ているのではなかった。彼らが来た理由はハンスの目撃情報を聞きつけてのことだった。とは言っても葵が通報したのではない。葵以外の人がハンスと葵が話しているのを目撃していた。その人の通報である。

ハンスの目撃情報とだけあって警察の対応も早く、数人の警察官と共にすぐに病院にやってきては葵がハンスと話していたことを告発。警察はすぐに葵に事情徴収を始めた。

「だから、ハンスとは確かに会いましたけど大して話はしていません。初対面ですし」

警察による事情徴収に母親は心配そうな顔をしている。無理もない。自分の子供が世界的大犯罪者と会って話までしているのだ。母親も葵が嘘をついてるとは思ってはいない。ただ、自分の娘がなにかの事件に巻き込まれてはいないかと心配なのだ。

「具体的にどんな話をしたかと聞いてるんです」

葵に質問している刑事は上のほうの役どころの人間なのだろうか。

相当質問しなれているようではあった。

その刑事は、ハンスの事件を追っている特別捜査本部の長でいまだに捕まえることの出来ないことに責任を問われていた。ハンスは追い詰めることができて捕まえることができない。

いや、いままでも追い詰めていたのか、それすら疑問である。なぜならハンスが犯罪を犯せばすぐに分かる。それにより警察はすぐに動きハンスの犯行現場に行く。そこにいけばほぼ間違いなくハンスがいるのだが、その後は昨日の事件のようにハンスには逃げられ多数の死者や怪我人が出るのである。

ハンスが警察をわざわざ呼び寄せているのかどうかは分からないが警察はもう長い間ハンスを捕まえることが出来ずにいた。もちろんハンスに関する有力な手がかりも特別得ることなく。

だからこそ、葵のような人間は貴重だった。

ハンスと会い、話をした人間。一体なにを話したのか。そこにもしかしたらハンスに繋がる有力な手がかりがあるかも知れない。そう考えている警察は葵を絶対に手放すことなんてできなかった。たった1%でも可能性を持っている葵と言う人間をこのまま帰すことはその1%の可能性ですら捨てるということ。

いままで警察のプライド、そしてなにより自分自身の面子を踏みにじられてきた刑事にとって葵は藁そのもの。まさに藁にも縋る思いだった。

「……ハンスがあたしに話しかけてきたんです。『あんたの心は読めない』って」

「心が読めない？」

この世界の人間がほとんど信じていない能力。ちから心を垣間見る能力。

だが、この刑事はそれを信じていた。

それにより、刑事の頭の中にはある一つのハンスを捕まえることの出来る作戦を思いついた。

それを思いついてしまえばもう刑事の頭の中にはそのことしかなかった。いままで逃がしてきたハンスを捕まえることの出来る千載一遇の好機。これを実行しない手はない。刑事の中の選択肢に他の作戦を考えると一切なかった。

「そうですか。ハンスはあなたの心が読めないといったんですね」

葵は静かに頷く。嘘を話している訳ではない。葵はハンスに会ってイメージとは違う感覚に襲われたものの深く関わりがあるわけでもない。ただ、偶然会って少し話しただけの存在。

葵は今日は祖父の見舞いに病院にきたただけなので質問に素直に答えて早く帰りたいかった。でも警察の人間からすればそういうわけにはいかない。

「わかりました。しかしあなたは世界的犯罪者に会って話までしている。はつきり言います。あなたの身は危険です。口封じなどでいつ殺されてもおかしくはない。ハンスはそういう人間です。ですからしばらくの間、あなたは我々警察が保護します」

「口封じって……、そんな危険な話はしていませんけど？」

「凶悪犯なんて言うのは何を考えてるのか分かりません。顔を見られたから殺す。声を聞かれたから殺す。そういう輩が凶悪犯なんです。ましてや相手は世界的大犯罪者、殺人も犯しています。あなたがその場で殺されなかっただけでも不思議なくらいです」

葵はなにも言えなかった。確かに不思議だ。

ハンスは世界的大犯罪者で人類の歴史至上最悪な凶悪犯と言われている。殺人や強盗などの凶悪犯罪を犯し世界中を恐怖の渦に巻き込んでいる。世界中の警察などの機関も捕らえる事ができずじまいで、野放しの状態。さらにそれだけの凶悪犯ならば懸賞金などがついてもおかしくはないのにその危険度のため情報提供の懸賞金のみで本人を捕まえることでの懸賞金すらつけられてはいない。

そういう思想が世界の常識であり、葵自身もそういう思想の元生きてきた。

だが、実際にハンスに会い話をした葵は不思議で仕方がなかった。なぜ殺されなかったのか。そして先入観で恐怖を感じたもののハンス本人に噂ほどの脅威を感じなかったこと。

葵は半ば仕方なく警察の言う通りに保護されることになった。保護されるということは警察関係の施設で一時期を過ごすということ。しばらくして安全だと思われる時期までは保護され監視下に置かれる。

「では、葵さんはわたしの車で移動しましょう」

葵は祖父に別れを告げ、病院を出て刑事の車へと乗り込んだ。パトカーではない私用の車のようだ。葵の母は心配そうにしていたが、念のため葵の母も一定期間保護されるようだ。葵の母は普通のパトカーで移動していく。つまり二人は別々の車での移動になった。

しばらく行くと刑事が無線でなにかを話している。どうやら少し寄り道をしていくとのこと。葵は車に乗っている以上、その刑事の行動に従うしかなかった。

第四話 聴取（後書き）

読んで頂きありがとうございます。まだ序盤ですが、最後まで読んで頂けると幸いです。

第五話 狂気

「あの刑事さん……、どこですか？　ここ？」

刑事が寄り道をすると言って連れてきたのは警察関係の施設ではない。そんなところからは遥かにかけ離れた廃れに廃れた朽ち果てた倉庫だった。所々壁が剥がれ下材がむき出しになっている上に古すぎて今にも崩れそうである。葵はなぜこんなところに連れてこられたのか不思議だった。

「さあ、降りてください」

「でも、刑事さん……」

「いいから……降りろ！」

刑事は嫌がる葵の腕を掴み強引に車から引き吊り出す。刑事は次に葵の口を手でふさぎ叫ばれないようにした。その行為に驚いた葵は必死に抵抗するが、男と女では力に差がありすぎてとてもとても敵わなかった。ましてや葵は小柄な体型なのでまったく抵抗することができなかった。

葵を無理やり引つ張り倉庫の中へと連れてきた刑事は、倉庫の支えのために立てられている柱にロープを使って葵を縛り付けた。そして話せない様に口にガムテープを何重にも貼る。

葵はそれでも必死に叫ぼうとするが、息をするのも苦しいほどにガムテープを巻かれそれすら叶わなかった。葵は仕方なく刑事を睨みつける。刑事はそれに気が付いたのか薄っすら笑いながら葵の眼

を見た。

「安心しろ。お前になにかをするつもりはない。お前はただの囚だ」

葵は刑事の口から出た発言に驚きを隠せない。

「ハンスは必ず、お前を助けにくる。俺が心の中でお前がここにいと知らせてやる。ハンスが現れれば捕まえて俺の大手柄だ」

刑事の考え……作戦はハンスと関わった葵を囚として利用し、ハンスが現れたところを捕まえるつもりらしい。

この作戦を思いついたのはハンスが葵に言った言葉”心が読めない”。ハンスは心が読めると信じている刑事にとつて心が読めない存在の葵にはハンスは必ず興味を持つ。興味を持った人間が捕まったとなれば助けざるを得ないだろうというのが刑事の考えだった。

これは長年ハンスを捕まえることを仕事とし、ハンスのこと細かいプロフィールングを組んでいた刑事の勘……いや、確信があった。ハンスは必ず葵に興味を持ち、そして必ず助けにくる。その確信があつてこそ今の状況。刑事の頭の中にはハンスを捕まえ、大手柄を得て一気に昇進する。その考えでいっぱいだった。

葵のことなど少しも考えてはいない。ただ自分の利益になる。それしか考えていなかった。

「さあ、早くこい……ハンス。来たらこの自前の拳銃で仕留めてやる」

葵は、刑事の眼を見て、素直に狂つてと思った。

ハンスを捕まえるためには手段を問わない。いかなる犠牲を払ってでも目的を達成しようとするこの刑事に葵はハンス以上に恐怖を感じていた。

そして、もう一つ。

この刑事の作戦は失敗だと葵は思った。なぜなら、ハンスが自分を助けにくるはずなど有り得ないことだと思ったからだ。確かにハンスは葵に興味を持ったといった。ハンスがどういった人間なのかはまだ良く知らないが確かに興味をもった人間がこのような目に遭っているなら助けにこようとするのは普通の感情だろう。

ただそれは、その人との間柄の問題だ。

家族でもなければ、長年連れ添った友人でもない。ただ少しずれ違っただけの存在。

例えば道ですれ違った人が翌日ニュースで亡くなったと言っているてもそれに気が付くことはない。ましてや葬式に行くことも有り得ない。今の葵とハンスの関係はそのような状態だ。ただ偶然会って少し話をしただけ。

どこの馬の骨かも分からない人間を危険を犯してまで助けにくるメリットなどどこにもない。

しかも相手はあの世界的大犯罪者なのだから当然だ。そう思うとやはりこの刑事はそこまで頭が回らないほど狂っているということ。葵にとっては脅威でしかなかった。

「ん？　いつまで睨んでいるつもりだ？　小娘……」

葵は気がついたら刑事を睨んでいた。というのも自分をこんなくだらない作戦に巻き込んだ刑事に対する怒りと、素直に信じてついて来てしまった自分に対する怒り。どこにもぶつけることのできない怒りは自然と刑事に向けられていて刑事を睨むしか葵に抵抗する方法はなかった。

刑事はゆつくりと葵に近づいてきて葵の髪の毛を鷲づかみにする。葵は驚きと痛みで声を上げるがガムテープに遮られ声は空気を振動させることなくかき消される。

「俺は、お前ら市民を守ってやってるんだぞ？　ハンスという世界的大犯罪者を捕まえて世の中を平和にしてやるうとしてるんだ。そんな俺を睨むなんて貴様何様のつもりだ？」

顔が近い。異常な正気。正気でない雰囲気。狂った人間だけが放つ気配。殺気以上の恐怖。葵はあまりの恐怖に刑事の眼を見ていられなくなり顔を背けた。

「くくつ……、それでいい。睨みつける相手は俺ではなくハンスのはずだ。それにしてもなかなか来ないな。少し痛めつけなければ現れないつもりか？」

そう言うつと刑事は、葵を睨みつけた。

狂気。

この刑事を纏っている狂気は凶器となって葵に襲いかかるうとしていた。葵は恐怖で刑事のほつを見ることができない。それでも刑

事の拳は高く振りかぶられ葵の頬に焦点を絞り今まさに振り落とされようとしていた。

葵はその気配を感じて恐怖に身を固める。歯を食いしばることすらできない恐怖に襲われながら。

突如鳴り響く轟音。

葵が殴られた音ではない。それよりも遙かに大きな音。

刑事はその音に驚き、葵を殴るのも忘れ、音のした自分の後方を見る。後方を見ると倉庫の扉がひしゃげて折れ曲がり今にも倒れそうになっている。一体どこの誰がやったのか。自然に起きたことではないだろう。

しかし刑事には確信があった。こんなことができ、いまここに囚である葵を助けにこれる人間など世界にたった一人しかない。そして刑事は絶対的な確信を持ってその名前を呼ぶ。

「ハンス……」

扉は倉庫の内側にゆっくり倒れ、地面に着くと同時に大きな音を放つ。倉庫であるがためにその音は反射し共鳴しエコーを伴い倉庫全体に鳴り響く。

そして、扉が倒れ外の景色が見え、先ほどまで扉のあったその場所には。

ハンスと呼ばれる一人の青年が立っていた。

第五話 狂気（後書き）

読んで頂きありがとうございます。第一部は次で終わりです。

第六話 解放

「ククツ……やはりきたな。ハート・グランス、ハンス……いや、柊翔」

倉庫の入り口にはハードスーツのようなものに身を固めたハンスが立っていた。倉庫の中にはそのハンスの到着を心待ちにしていた刑事と来るはずなどないと決め付けていた一人の女性。

ハンスは二人の姿をその眼でしっかりと確認すると、左足を前に出しゆつくりと倉庫内へと立ち入っていく。

「おっと、近づくな！ ハンス！」

刑事のその言葉にハンスの足取りは停まる。いつのまにか刑事の其の手には拳銃が握られその銃口はハンスへと向けられていた。ハンスは拳銃を向けられながらも無表情のまま刑事を見ている。

「これでお前に会うのは何回目だろうか、いつもお前にはことごとく逃げられ、俺はいつも上司に頭を下げる日々だった。それもこれもお前が世界で犯罪を犯し荒らしまわっているせいだ！ お前は捕まれば間違いなく死刑。だったらこの俺自ら貴様をこの世から消し去ってやる。さあ最後に言い残すことはないか？」

ハンスは刑事の言っている言葉に少しの反応も見せない。

「どうした？ なにも言い残すことはないのか？」

再度聞いてくる刑事に対してハンスの口がゆつくりと開く。

「……その娘を解放しろ。そうすれば、命だけは助けてやる」

ハンスのその言葉に刑事は耳を疑った。それもそのはずだ。今人質を取りハンスに拳銃を向けているのは刑事であってハンスではない。本来そのような言葉がハンスから出てくるはずもない。

また葵も驚いていた。来るはずなどないと思っていたハンスが自分を助けに来たからだ。

「ククツ！ 状況を良く見ろ！ マヌケが！ 命は助けてやる？ それは俺のセリフだ、助ける気はないけどな！」

その言葉が発射の合図とでも言わんばかりに刑事は拳銃の引き金を引いた。拳銃内の弾頭はトリガーが引き戻る力とそれを押し出す力に比例し、また銃口内のまるでネジを埋め込むような構造の力も働き、猛スピードでハンス目掛けて飛んでいく。

だが、その弾がハンスに当たることはなかった。ハンスはまるで空を自由に飛びまわる鳥のように空高くジャンプしたのだ。その予想外の光景に驚いた刑事は空中にいるハンス目掛けて弾を発射させることもできずにいる。その間にハンスは刑事の手前まで迫ると刑事の首の後ろに打撃を与えた。

打撃を与えられ気が朦朧とした刑事は思わず拳銃を離してしまう。ハンスはその一瞬を見逃すことなく捕らえ落ちていく拳銃を上から足で踏みつけるように地面へと叩き付けた。その後、刑事とは反対の方向へと拳銃を蹴り飛ばし、拳銃は倉庫の遥か先端まで飛んでいった。

今、ハンスを中心として二人の人間がいる。一人は地面で気を失い倒れている刑事。そしてもう一人は柱に繋がれ口にガムテープを巻かれている葵だ。

ハンスは葵へとゆっくり近づくとガムテープを出来るだけ葵が痛くないように取り除いた。

ようやくガムテープから開放された葵は新鮮な酸素を吸うために大きく息をした。それでもまだ少し息は荒げたままだ。だが葵はそれよりも早くハンスに聞きたかった。

「助けてくれてありがとう。でも、どうして？」

葵の言葉にハンスが葵の眼を見る。

「どうして助けに来たの？　あなたがあたしを助ける理由なんか……」

葵の言葉はしっかりと聴こえているだろうハンスは決して表情を崩さない。無表情という言葉が最も似合うだろう。葵も初めて会った時から気がついていた。ハンスは笑わない。不敵な笑みを浮かべることこそあれど感情のこもった笑みを浮かべることはない。感情など捨ててきたと言わんばかりにハンスは常に無表情だ。

「言っただろ？　俺はお前に興味を持った」

「そんな理由で、助けに来てくれたの？」

「勘違いするな。確かに今回はお前を助けにきたがそれはお前を観察するためだ。俺は心が読めないお前のことをもつと知りたい。最

後にお前に賭けてみることにしたんだ。駄目ならお前もこの世界と一緒に消してやるさ。ただ、まだ死なれちゃ俺が困るんだ」

「賭ける？」

ハンスの言葉の意味を理解できなかった葵はその言葉に疑問を抱いた。

ハンスと葵が話をしているとまだ朦朧とはしているが、刑事が意識を取り戻した。手を使い必死に立ち上がろうとしている。ハンスと葵もその光景に気がつき、刑事のほうを見る。するとハンスは倉庫内に落ちていた棒切れを拾い刑事の頭に狙いを定める。

「待つて！ どうするの？」

ハンスの行動に気がついた葵はハンスを静止する。どうすると聞いた葵だが、状況から見てハンスが棒切れを使って刑事に止めを刺そうとしていることは誰の眼から見ても明らかだった。

「見れば分かるだろ。こいつを殺す」

「駄目よ！！」

葵はハンスに向かって叫んだ。

「駄目？ なぜだ？ こいつはお前をこんな目に遭わせているんだぞ？ こいつが殺されない理由なんかない」

「人殺しなんかやつちゃ駄目よ！ 確かにこの人の行動はやり過ぎだしあたしも許せないけど、後はちゃんとした警察に任せるべきよ」

葵はハンスの眼を見て言った。ハンスもしつかりと葵の眼を見ている。しかしハンスはゆっくりと眉間にシワを寄せていく。

「いい加減にしろよ。綺麗事ばかり言いやがって。殺しは駄目だ？ 世の中の人間はそんなこと思っちゃいねえぜ。確かに表向きはお前のように綺麗事を言う奴らばかりだ。だが、心ではそんなことは思っていない。みんな殺してやると思ってるんだ。特に自分をひどい目に遭わせた奴に対してはな。ただそれを実行できないだけ。だが俺は出来る。何人もの人間を殺してきた。こいつもそのうちの一人に過ぎない」

その刹那、なにかを弾くような音と共にハンスの左頬を衝撃が走った。葵の平手がハンスの頬を叩いたのだ。

「いい加減にするのはあなたのほうよ！ 子供みたいに屁理屈を抜かしているだけ。人間なんだから間違いもする。でも人間だから、やり直すことも出来るの。自分が犯した罪を償ってまともな人間になれる」

ハンスは葵を睨みつける。また葵もハンスを睨みつけている。だがハンスは葵から目を逸らすと足元にいる立ち上がろうと頑張っている刑事を睨みつける。そして、思いつきり棒切れを振りかざすと刑事の頭目掛けて振り下ろした。

だがそれが貫いたのは刑事の頭ではなく地面だった。地面には棒切れで貫かれ、地面に亀裂が入っている。ハンスが力いっぱい振り下ろしたのは火を見るより明らかだった。ハンスは棒切れを離すと刑事と葵の場から離れていった。葵は歩いて離れていくハンスの後姿を目で追っていた。

「これはお前の問題だ。後は警察に引き渡すなりなんなり好きにすればいいさ」

ハンスは自分が壊したドアのところまで歩いていく。そして再び葵のほうに向きなおした。

「一つ言っておくぞ。この世界はお前が思ってるほど甘くはない。お前のその行動はいつか自分を破滅に導く。人間は誰しもが闇を持っている。お前は今まで偶然にもそれに出くわさなかった。ただ運が良かっただけだ」

ハンスはそう言っただけで光の中に消えていった。

葵はその姿を目で追い終わると、自分の携帯を使って警察に連絡した。もともと葵の行方を捜していたのかほとんどなくして警察が到着した。そして葵に危害を加えた刑事はその場で取り押さえられ逮捕された。

第六話 解放（後書き）

読んで頂きありがとうございます。これにて第一部は終了です。次回からは第二部です。次回以降もどうぞよろしく願います。次

第七話 人間の心

事件から数日 。

葵は、事件でのストレスや精神を癒すために友達と3人で休みを利用してちよつとした旅行に来ていた。旅行とは言っても日帰りで車で3時間ほどかかる地元では少し知れた海まで遊びに来ていただけなのだが。そこでおいしいものを食べて、遊んで、リフレッシュした葵は少し気分が楽になっていた。

それでもまだあの事件のことは思い出す。葵にとってあれほど恐怖を感じたのは正直初めてだったからだ。人間の狂気に触れたあの出来事は。

だが、それと同時に葵はあの事件以来少し考えるようになった。

人間の心について 。

人間の心は実に不思議だ。それは時になによりも優しく暖かいものにもなり、時になによりも怖く冷たいものにもなりうる。人それぞれ考え方も違えば言うことも違う。だから葵はハンスに言った言葉、そしてハンスに言われた言葉を思い出していた。

”人殺しは駄目” 自分で言ったこの言葉に葵は少し疑問を感じていた。確かに人を殺すのは良くない。そんなことは誰もが分かっている。自分だって人を殺したいとは思わないし、殺されたくない。でもそれはそう思っているだけなんじゃないかと葵は思った。本当は殺したいほど憎い奴なんていままで何人か出くわしてきた。

機嫌が悪い時にはよくそんなことを思う。人に嫌なことを言われて機嫌が悪くなったときさらに追い討ちをかけるようになにかを言われると思わず声を張り上げて叫んでしまう。誰かと喧嘩して、そいつが目の前にいるだけで機嫌が悪くなって気分が害される。あいつなんていなければいいのに。そんなことを誰もが思っている。

でもそれは人間なんだから当たり前なんではないかと思う。誰だって気分良く過ごしたい。それを邪魔されれば機嫌が悪くなるし、八つ当たりしたり自分の闇の部分が露骨に見えてくる。人間は誰だってそうだ。光と闇。表と裏。表裏一体の二つの心を併せ持つ。裏の部分が強くなれば、人は犯罪を犯す。いわゆる欲望だ。いろいろな欲がある。誰だって楽しみたいし、人生を楽しみたい。楽して金銭を得ようと強盗なんかを働いたり、邪魔な人間をこの世から消し去りたいと自分の願いを叶えるために人を殺したり、好きな人を独占しようとしたりしてさまざまな犯罪に手を染める。

あの刑事もそう。ハンスを捕まえるという自分の目的に加え、自分がこれ以上惨めにならないように自分を守るためにあいつた行動をとった。確かにやり過ぎだとは思いますが、自分の欲に従えばそれは極めて自然なことだったのかもしれない。そうやって考えれば人を殺していけないとか、人のものを盗つてはいけないと言うのは人間のエゴのようにも聴こえる。人の物を盗りたい欲、自分のものを他の誰にも渡したくない欲。一体どっちが正しいのだろうか。確かに法律で決められ人のものを盗ると言う行為は犯罪になる。でもそれだけでその行為が間違っているなどどうして言えるのだろうか。

ハンスはそんな人間の心が見えているのかも知れない。

表だって人に聴こえのいいように言う。普通の人間ならばその裏でどう思っているかなんて分からない。だから、その人の口から出

たその言葉を信じるしかない。でもハンスはその裏が見えてしまう。だから言ってることと思っていることが違えばすぐに分かる。きつとハンスは今まで普通の人の何倍もの裏の心を見てきたのだろう。だからこそ人を嫌う。決して笑うことのないその表情は人を信じないその心から生まれたもの。

でも、もしそうだとしたら……ハンスが人の心の裏の部分ばかり見てきたのだとしたらきつとハンスは見えてはいない。そう考えた葵は再びハンスに会いたいと心で願っていた。ハンスに伝えたいことがある。葵はそんなことを考えながら家路についた。

家に帰ってきた葵はこんどは疲れた様子で家の居間にあるソファ―に腰を下ろす。そして何気なくテレビをつけてニュースを見ていた。その時テレビ画面の上部にニューステロップが流れた。

” 今度は駅を爆破。ハンスによる被害で重軽傷者多数 ”

葵はそのテロップを見た瞬間立ち上がり自分の身体が疲れているなんてことを忘れていたかのように急いで家を出た。テロップに出ていたのは近くの駅、今からいけばハンスに会えるかも知れない。そう思い葵は車へと再び乗り込み、家のガレージから出ようとした。

その瞬間、車は大きな衝撃を受け、ガレージの壁へと激突した。葵の乗っていた車は原型を止めないほどに破壊されている。葵の乗っている車は大型のトラックとぶつかり半壊したのだ。そして中にいた葵は頭から血を流し、意識を失っていた。

第七話 人間の心（後書き）

読んで頂きありがとうございます。今回より第二部のスタートとです。よろしく願います。

第八話 生還

人の心は不思議で仕方がない。

孤独を望むもの、誰かと一緒にいたいと望むもの。

動物を好きなもの、動物を嫌いなもの。

みんな基本的な見た目にも身体の構造にも対して差はないのに、心の持ち方一つで感性も考え方も、その生き方でさえも全然変わってしまう。今世界には何十億もの人間がいるのに、誰一人同じ人間はいない。同じような考え方を持っていてもどこかで違いが生じ、矛盾も生まれる。

でも、だからこそ人の考えを【心】を理解しようと人は努力する。その人の気持ちに共感しようと心を知りたがり、共感してほしいと願う自分の心を開く。そうやって人間は、ずっと生きてきた。時には誤解を生み、憎しみや悲しみにも発展するだろう。しかし、その裏には必ず希望も存在する。

人の心は表裏一体。

昔は大好きだった人が今では大嫌いになったり、昔は大嫌いだった人が今は大好きだったり、好きなのに嫌われるような行動しかとれなかったり、一生懸命努力しているようでしていなかったり、努力しても無駄だと分かっているても努力したり、人は心があるから人なんだ。

なにが正しくてなにが間違ってるかなんて誰にも分からない。で

も分からないからこそ人はそれを追い求める。そして、自分の感性にすぐわないものは間違っていると判断し、敵と見なす。そして、自分の感性に従うものだけを追い求めて行動する。でも、もちろんそんなことでは生きてはいけない。だから人は自分の心を隠し嘘をつく。あたかも自分も同じ考えだと言わんばかりに自分の気持ちを隠し、その人に賛同する。

そうすることが自分の身を守る最も安全な方法だと言うことを人は長い歴史の進化の中で学習してきたからだ。

でも、人の心を見ることが出来るものがいたとしたら、その人にはそんなことをは一切通じない。嘘をついていることも隠していることも見破られ、自分が必死で隠している汚い闇の部分でさえも見透かされてしまう。

それがハンスだ。

ハンスは人の心が見える特異な能力のために、人の本質を知っている。どんなに心が綺麗な人でも感情がある限り、怒りもする。そうなれば憎しみも出来るし、心には闇が出来る。それを隠すために無理やり笑顔になったりして隠してもハンスには全てが見える。

人は誰でも人の心が見えればいいのにと願う。でも人の心が見えるというのは本当にいいことなのだろうか。それは、やはり人によるだろう。人は考え方も心もそれぞれ違うのだから。

ハンスは人の心ばかりを見る。言葉よりも心のほうが真実だからだ。だからハンスには闇の部分しか見えてはいない。ハンスも人の光の部分を見ることが出来れば少しくらいは考え方も変わるかもしれない。

葵は静かに目を開けた。

「……、ここは？」

「葵！！ よかった！」

葵は頭に包帯を巻き、病院のベッドで横になっていた。頭を打ち意識を失ったものの、幸い発見が早く大事にはいたらなかったが検査入院と言うことで祖父のいる病院に十日ほど入院することになった。

母親は葵の手を握り泣いている。先生や看護師の人達も駆けつけてきた。葵は少しだけ思い出していた。自分が事故にあったこと。そして、死にかけたこと。そして今、生きているということ。

「お母さん、ごめんね」

葵は心で思うよりも、先に言葉が出ていた。もう少しで死ぬところだった自分を、これほどまでに心配してくれた母親に対してなぜか申し訳ない気持ちになったからだ。そして葵は、自らの事故により、命の大切さに前よりもほんの少しだけ気がつくことが出来た。

第八話 生還（後書き）

読んで頂きありがとうございます。前回と今回の話は繋ぎとなります。次回より第二部メインの話となりますので引き続きよろしくお願ひします。

第九話 目的

葵が病院に入院して数日、これ幸いと葵は動けるようになってから毎日のように祖父の病室に通っていた。というよりももうすでに祖父の病室にいる時間のほうが長い。祖父も、葵の頭に巻かれた包帯を見て、さぞ心配していただろうと思い。元気な姿を見せるという目的も踏まえて祖父に会っていた。

葵の祖父は肺癌だ。しかもすでに末期のために酸素マスクを着け、肺や気道にある腫瘍のせいでうまく話すことも出来ない。だから、祖父の病室に行っても葵から話すだけで祖父からの返答は一切ないでも葵が話しているとき祖父はいつも葵を見ている。葵もそれには気がついていて、きつともっとたくさん話したいこともあったんだと思う。でも声も出せず、寝たきり状態の祖父には葵を見ることしか出来ない。それが現実だ。

葵はおじいちゃん子だ。昔からよく祖父の話を聞いていた。祖父といえることも多かったし、祖父もよく葵を可愛がっていた。そんなこともあってか、葵は今、介護の勉強をしている。将来は介護施設で働くのだと頑張っている。家族の中で最も祖父の世話をしているのも葵だろう。プロではないものの知識はあるから必然的に葵が世話をすることが多かった。とはいえ強制ではない。葵が自ら望み、世話をしているのだ。

もう、助かる見込みはない、いつ死んでしまってもおかしくない祖父を最後まで見届けたい。それが葵の願いだった。そして葵はもう一度祖父と話をしたいと願っていた。最後にもう一度だけ祖父と話をしたい、葵が祖父にいつも話しかけるのはそういった願いも込められている。話しかけていればいつか返事を返してくれる日があ

るのではないかと言う葵の願い。

今日の外は晴れ、いつにもまして青空が綺麗な日。

ぽかぽかと日当たりが良く、ささやかな風が葉に当たり木霊して自然の音をたてる。病院の中庭にしてはなかなか活気がある。今日のような日は散歩に最適だからだろう。

葵は中庭のベンチに座って日向ぼっこをしながら思った。祖父はもう外でこうやって自由に歩くことも出来ず、一緒に笑うことも出来ず、ただ部屋の中で死を待つだけなんだと。そう思うと葵は、外の華やかな空気とは対照的に暗く沈んでいた。

「元気がないな」

葵の後ろには、ハンスがいた。葵は驚いた、なんの気配もなく突然現れたハンス。でも葵はまたすぐに前を向き下を向いた。ハンスは葵の後ろから動こうとはしない。

「いいの？ こんなところにいて、見つかったら……」

「不要な心配だ。俺には人の心を読む力と跳躍力がある」

「そう」

「どうした？」

「……あなたには関係ない」

葵は俯いたままハンスと話している。ハンスはそんな葵の姿を見ると空を眺めていった。

「今日は、空が綺麗だ。澄みきつた青空が広がっている。俯いていてはそんな綺麗な空が見えないぞ」

葵は何も答えないまま俯いている。

「……その頭の怪我、事故に遭ったんだろ？　せつかく生きていられたんだ。もっと人生を楽しめ」

その言葉に葵は突然立ち上がり、ハンスのほうを向いた。そして眉間にシワを寄せ大声でハンスに言い放った。

「あなたに言われたくない！　人の命の大切さも分からないあなたが、命を語らないでっ！！」

その言葉に、ハンスは何も言うことなく葵の眼を見た。葵の眼は少し潤っていた。葵もまたハンスの眼を見る。

「お前の考えていることは訳が分からない。人に殺しては駄目だと言ったり、助かった命があってもそれを喜びもしない。俺にはお前の心が見えない。ほんとはどう思っているんだ？」

「喜んでいるわよ。あたしだってまだ死にたくない。死なずに済んだから嬉しいに決まってる。でも、今は自分の命がどうこう言ってる時じゃないのよ」

ハンスは葵の言葉の後もしばらく葵の瞳を見ていたが、一旦ため息をつくと後ろに向き直りその場に座り込んだ。ハンスの位置からは病院の中庭と病院全体がよく見える。

「……どうして駅を爆破したの？」

葵は先日聞いた駅の爆破事件についてハンスに聞いた。思えばあの時、あのニュースを見て葵は家を飛び出し事故に遭ったのだ。ハンスはしばらく沈黙を保った後、葵のほうは決して見ることなくその口を開いた。

「俺の目的のためだ」

「目的？」

「そうだ。俺の目的は『死ぬ』こと。この腐りきった世の中の全てを破壊してな」

「どついつこと？」

「俺は昔、親に見捨てられた。俺のこの能力^{ちから}を恐れた両親。それに友達だったやつ。全部俺から離れていった。世界は俺の存在を認めない。特異な能力^{ちから}を持つ俺は、『化け物』なんだ。だから、化け物は化け物らしく世界を壊して、死んでやろうと思ってな」

葵は少しだけハンスの心の闇の部分を知ることが出来た気がしていた。自身も望まなかった特異な能力^{ちから}のせいで親にも友達にも忌み嫌われ、誰からもその存在を必要とされず、化け物扱いされ、人間とも認められず孤独の中で生きてきた。どれだけ辛い過去だったのだろうか。親も友達もいる葵には到底理解できないことだった。

ハンスは人間の醜い部分だけを見て生きてきた。それに人は気がつくことはない。それはハンスとこうして話をする人間がいなかった。誰もハンスとは話などしない。怯えて恐怖して逃げるだけ。

だが、ハンスと話をしている葵は気がつき始めていた。ハンスはまるで子供だ。その目的も理由も行動も。

ハンスの心はあまりにも『純粹』すぎる。

それ故に傷つきやすく弱く脆い。ハンスの強情なまでの行動はそれを隠すため。本当は誰よりも弱く脆い心を隠すための、自分の身を守るための防具なのだ。

第九話 目的（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

今回より、正式な第二部のスタートです。よろしくお願いいたします。

第十話 以心伝心

「ハンス……翔。あなたのその人の心を垣間見る能力^{ちから}信じるわ」

葵のその言葉に、ハンスは座ったまま葵のほうを見た。

「信じる信じないはお前の勝手だ。好きにすればいいさ。ただ俺はこの能力^{ちから}を呪っている。例え望まなくても聴こえてくる人の心の声に気が狂いそうになるときもある。だからこそ、俺はお前を知りたいと思ったのかも知れない。俺はお前としても心の声が聞こえないつまりはお前の心の想いが分からない。もしかしたらお前はいままで俺が会ってきた人間とは違うのかも知れない」

葵はハンスのその言葉に以前ハンスが賭けると言っていたことを思い出していた。つまり葵に賭けるということは、心を垣間見ることができない葵は他の人と違うのかも知れないということ。人間の闇ばかり見てきて世界を破壊することが目的のハンスが最後に見出した希望。それが葵である。

「あたしも、あなたが知りたくなった」

葵はこの時、思った。

ハンスという、柊翔という一人の人間の心を救うことの出来る人間は自分しかないのかも知れないと。ハンスの汚れなき純粋な心を救うことの出来る人間は自分しかないのかも知れないと。

葵はハンスとは違い人の心を垣間見ることなど出来ない。しかし、葵は少しずつハンスの心が分かるようになってきていた。ハンスの

思い考えていること。ほんの少しだけ分かってきたのだ。

「でも……、さっきも言ったように今はそんな場合じゃないの」

ハンスは腰を上げて立ち上がり葵のほうを見た。

「話してみろよ」

「……今、あたしの祖父はこの病院で入院しているの。末期癌でもう長くはない命。いつ死んでもおかしくはない。あたしは祖父のことをすごく大切に思っていたから祖父がもうすぐ死ぬなんてことが信じられなくて、その事を考えると悲しくなる。癌のせいでもう長い間話してもいないから祖父の考えていることも分からない」

「そうか。だったら俺をその祖父の部屋へ連れて行け」

「え？」

「俺がそいつの心を読んでお前に伝えてやる」

葵はハツとした。確かにハンスの能力ちからがあれば、祖父の心を読み、祖父の伝えたいことを伝えることが出来る。そして葵は気がついた。このことはハンスでなければ出来ないことだと言う事。ハンスだからこそ出来る。ハンスの能力ちからだからこそ出来ること。

そして葵はハンスに祖父の心を垣間見てもらうことを決めた。

夜。

昼間の間に祖父の病室に行ってハンスの顔を見られれば大騒ぎになるかもしれない。そう考えた葵は夜になってからハンスに来てもらうように言い部屋の番号を伝えていた。葵も自分の病室から抜け出し、祖父の病室へと向かう。夜の病院とは実に不気味なのが、葵はそれよりも祖父と久しぶりに話ができるかと思うと嬉しくて仕方なかった。

そして、葵は祖父の病室へとやってきた。祖父はその日なぜか寝ていなかった。昼間もずっと寝たきりなのだから眠たくはないのだろうか。祖父は目を開き葵が入ってくるのを見ていた。葵は祖父の部屋から窓の外を見る。そしてなにかに気がついた後、祖父のほうを見て、静かな声で言った。

「おじいちゃん、驚かないでね。今日は久しぶりにおじいちゃんとお話が出るよ」

そう言つと、葵は窓の鍵を開けた。するとそこからハンスが静かに入ってきた。祖父は驚いた表情をしている。まだ祖父が元気だった頃からハンスは世界中で暴れていた。つまり祖父もハンスのことは知っていた。世界的大犯罪者が今、自分の目の前にいることで当然祖父は驚く。

「あんたが、葵の祖父か。さあ話せ。お前の心の代弁を俺がしてやる」

驚いていた祖父だが、すぐに状況を読み込み冷静になる。ハンスも祖父の心を垣間見はじめた。

『葵、大丈夫か？ その頭の怪我』

「うん、ごめんね。心配かけて」

『誤るのは俺のほうだ。いつも世話になっていて本当にスマン』

「なに言ってるの？ おじいちゃんは大切なんだから当然だよ」

葵は久々の祖父との会話に時間を忘れて話続けた。祖父も久々の葵との会話を楽しんでいるようだった。時間はいつの間にか深夜になっていた。葵との会話を続ける祖父。祖父の言葉を代弁するハンス。そして葵。三人はいつの間にかひとつの空間で一つになっていた。

しかし、時に時間は残酷な事を生む。

久しぶりに葵と話をしたことで興奮したのか。夜遅くまで起きていたことがいけなかったのか。祖父は突然口から血を吐いた。酸素マスクが血に染まる。呼吸が荒くなり心拍も大きく乱れる。

葵は、ハンスに逃げるように促すとすぐにナースコールを押した。ハンスは迷惑をかけまいとすぐに部屋から出ようと窓に手をかけた。その時、ハンスの身体は一瞬停まった。そして葵の祖父のほうを見た。祖父はとても苦しそうだ。葵もすぐ戸惑っている。その時、病室のドアが開き、先生達が入ってきた。そしてすぐに応急処置を始めた。

すでにその時、ハンスの姿は病室から消えていた。

第十話 以心伝心（後書き）

読んでいただきありがとうございます。次回もよろしくお願いします。

第十一話 祖父の望み

昨晚の出来事など、なにも知らないかのように今日も天気は青空を保っていた。ここ何日かはずつと晴天を保っている。今日も葵は昨日ハンスと会ったベンチに一人座っていた。ここで座っていればまたハンスが現れるのではないかと思っているからだ。

「また、ここにいいのか」

その声はハンスだった。葵の予想は当たりハンスはまたここに現れた。葵はすぐに後ろを振り返るがそこにハンスの姿はない。確かに声が聴こえた葵はキョロキョロしながらハンスを探す。

「こつちだ」

声は上からした。見るとハンスは木の太い枝に座っている。確かにこの位置なら周りからは葉やら枝やらが邪魔してハンスがここにいることなどはまったく見えはしない。ハンスを見つけるためには木の下まで来て上を見なければ分らない。ハンスも少し人に見つからないための努力をしたようだ。

「あ……ありがとう。昨日は。おかげで楽しい時を過ごせたよ」

葵は見上げながらハンスに向かって言った。ハンスは前を向いたまま葵のほうを見ようとはしない。

「それより、祖父の容態はどうなんだ？ あの後どうなった？」

「うん、大丈夫。安定したよ」

「そうか」

葵は再びベンチに座り俯いた。

「もうほんとに、長くはないんだね。おじいちゃん今まであんな風に血を吐いたことなんていままでなかったのに」

葵の目から涙が零れている。葵は今とても辛いだろう。ずっと、大切にしてくれた祖父の死が間近に迫っている。本当にいつ死んでもおかしくはない。そんな状況で葵の心は深く深く堕ちていた。死んでしまえば、もう話すどころか姿すら見ることが出来なくなる。人間はいつかは死ぬものだとは分かっているとしてもそれが現実となった時本当に辛いものだ。

「ちょっと聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「え？」

ハンスの突然の問いに驚き、葵は思わず顔を上げる。目にはまだ大粒の涙が残っている。ハンスはその涙を見て一瞬、動きを停めたがすぐに質問をはじめた。

「おまえは、祖父のことを大切に思っているんだな？ 出来ることなら死んでほしくないほどに」

葵は、声で答えることなく頷いた。

「だが、おまえの祖父はもういつ死んでしまってもおかしくはない状態だ。おまえはそんな祖父を見て、叶えられる願いがあるのなら

叶えてやりたいと思うか？」

葵は、不思議そうな顔をしながらも再び頷いた。

「そうか。じゃあ、お前は祖父を殺せるか？」

「……え？」

葵はここに来て初めてハンスの質問に対し突発的に声が出た。ハンスの予想外の質問にあまりに驚いたためである。

「どうということ？」

葵は、ハンスの言葉の真相を確かめるためにハンスに聞いたのだ。

「昨日、おまえの祖父が血を吐いた時、俺には祖父の心の声が聞こえた。お前の祖父が今望んでいるのは出来るだけ長く生きることじゃない。少しでも早く今の苦しみから抜けるために早く死にたいと願っている。だが、ここは病院だ。早く死にたいと願っていてもそれはできない。だから俺に頼んできた。『自分を殺してくれ』と」

ハンスの言葉に葵は言葉を失う。しばらくの沈黙の後、葵の口が動いた。

「あ、あなたも冗談言つのね。でも、言ってもいい冗談と言っちゃ駄目な冗談があるのよ！！」

葵はハンスのほうを睨みつけてハンスに大声で言い放った。ハンスは無表情のまま葵のほうを見ている。

「俺が……冗談を言うと思うか？ お前は俺に言ったな人を殺すのはよくないことだと。命を大切にしろと。そして祖父が大切に望みを叶えてやりたいと。だが、祖父が望んでいるのは『死』だ」

葵は思わずベンチから立ち上がりハンスの顔を見ながらゆっくりと後ずさりする。葵の目には再び涙が溢れてきている。

「そんなの信じない。……おじいちゃんがそんなことを思うわけがないじゃない。おじいちゃんだって生きたいと思ってる。だから今も頑張ってるじゃない。やっぱりあなたの能力は信じる^{ちから}ことができる！」

葵は振り返ると病院のほうに向かって走りだした。手を目のところにやり、泣いていることを覆い隠すように必死で必死で走っていく。ハンスはそんな葵の姿を表情一つ変えずに葵の姿が見えなくなるまでひたすらずっと見ていた。

祖父の命はもう長くはない。末期の癌で手の施しようがなく今はただその時を待つだけの状態。発展した現在の医療のおかげで祖父は長く延命しているだろう。この医療技術がなければもうとつくに死んでいたかもしれない。そんなことは、病院の関係者も、葵の家族も、祖父もそして葵もよく分かっていた。

そして、葵はほんとうは気が付いていた。祖父が望んでいることは生きることではなく死ぬこと。祖父は入院してからずっと苦しんできた。食べ物も受け付けず、歩くことも出来ず寝たきりで床ずれを起こし痛み、腰に負担はかかり呼吸するだけでも機械に頼らなければ満足にすることもできない。そんな苦しみから解放されるため

には死しかない。ただそれでも葵は気持ちの面で、心でそれを認めたくはなかった。

祖父が死を望んでいるなんてことは考えたくもなかった。たとえ気が付いていてもそれを考えないようにすることで気持ちに嘘を覆い被せてでも、祖父に生きていてほしい。それが葵の望みだった。だからずっとそのことには触れないでいた。

葵はただ自分のベッドで布団に蹲って泣くしかできなかった。自分の力ではどうすることも出来ない現実を突きつけられ、その無力さと儚さに涙するしか方法はなかった。

第十一話 祖父の望み（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回で丁度半分になります。残り半分よろしく願います。

第十二話 決意

その部屋には様々な医療器具が置いてある。そして、命が消えようとしているのを察知するとすぐにそれを知らせ警報が鳴るようになっていた。全ては一人の人間の命を延ばすため。夜になるとそこにはただ機械音だけが木霊している。

一人の老人がその機械に頼り生きていた。その横に置いてある椅子には、一人の女性が座っている。それは葵だ。葵は、祖父のことを考えると立ってもいることが出来ず、思わず祖父の病室までやってきたのだ。そして、その部屋にある椅子に座り祖父の寝顔を見ている。葵の祖父はずっと寝たきりだ。朝も昼も夜もずっと眠っている。起きているのは一日でたった数十分程度。この間ハンスによって葵と会話したときはかなり長く起きていたため身体に負担がかかったのだろう。

「……おじいちゃん」

葵の声がポツリと木霊する。機械音に混ざってほとんどはかき消されたが、祖父の耳にはきちんと届いているのだろうか。葵はそつと祖父の手を握る。

「生きるってそんなに苦しいことなのかな」

葵の声は震えている。祖父の手を握っている葵の手に雫がポタリと落ちる。

「おじいちゃんは生きてるの？ それとも生かされてるの？」

葵は祖父の手に頭をつけるようにうずくまった。

それは、泣いている自分を隠すためだろうか。祖父の気持ちを知っていてもそれを隠そうと必死に足掻いてきた。祖父が死ぬという現実を認めたくない、信じたくない自分の心の弱さを隠すためだろうか。葵の心は誰よりも強く奇跡が起きることを願っているだろう。

もし、祖父の病気が直ればどれだけうれしいだろう。一緒にどこかへいこうか。祖父も葵も動物が好きだ。だから葵がまだ幼かった時二人でよく動物園へと言った。そこにはたくさんの動物がいて、みんな活発に生きている。葵と一緒にいた祖父はそんな葵によく言っていた言葉がある。

『動物の寿命は人間よりもずっと短い。だから、みんな必死に今を生きようとしているんだ』

それは、葵に今を後悔することなく生きなさいという祖父の葵に対する言葉だったのだろう。葵は幼いながらも祖父のその言葉の意味を必死に理解しようとした。祖父のその言葉は、しっかり葵に届いているはずだ。だから、葵は命に対してすごく敏感だ。祖父がよく葵を動物園につれて来ていたのも動物達の生きる姿を葵の目に焼き付けたかったからではないだろうか。

いつも優しくかった祖父が一度だけ葵に本気で怒ったことがあった。

あれはいつだったろうか。まだ葵が幼く、命に対して大した感情も抱いてはいなかった時。葵は、カエルを殺してしまったことがあった。それは不意に驚いたがための行動だったのだろう。突然飛びついてきたカエルを葵は思わず手で払いのけ、地面に叩きつけられたカエルが起き上がるうとしたその時、葵はその足でカエルを踏み

潰したのだ。

それを知った祖父は葵に本気で怒った。

祖父に怒られ初めて葵は自分がやったことの大きさを知り、初めて後悔と悲しみに襲われた。失った命はもう二度と帰ってはこないだから、今を必死に生きるんだ。生きることをあきらめてはいけない。あきらめるのは死ぬ時だ。祖父がよく言っていた言葉に葵は、心のより所を見出していた。そして、その言葉を信じて葵はずっと生きてきた。

だが、祖父は今『死』を望んでいる。生きることをあきらめ死に向かおうとしている。だからこそ、葵には理解できなかった。いままで信じてきた言葉がその本人によって覆されたことを。

気がつくのと、いつのまにか朝になっていた。葵は祖父のいる病室で眠ってしまったようだ。祖父が生きていることを示す機械音は相変わらずまるでリズムでも刻んでいるかのように一定の速度で流れている。葵は顔を上げ、祖父の顔を見る。祖父は今安らかに眠っている。しかし、近いうちに必ず祖父の顔は必ず苦痛に歪むことになる。

今の状態が続く限り。

葵は立ち上がると、祖父のいる病室から出て行った。そして、一直線にあの場所へと向かった。ハンスと会えるあのベンチへと。

だが、葵がそこへたどり着く前に葵はハンスの姿を見つけた。ハ

ンスは逃げも隠れもせず平然といつもの無表情の表情で葵の前に立っていた。葵はハンスの眼を見る。

「心は……決まったのか？」

「一つお願いがあるの」

「なんだ？」

「祖父の……おじいちゃんのほんとうの心が知りたい。お願い。もう一度、おじいちゃんと話をさせて。今度は私の家族も一緒に」

ハンスもまた、葵の眼を見ている。そして、心が読めないまでも葵の目からその決意の高さを感じ取っていた。ハンスは一度目をつむり、しばらく沈黙した。そして再び目を開けると葵に言った。

「分かった」

ハンスの目もまた真剣だった。

葵もハンスも分かっていた。大勢の人前にハンスが姿を現すということはどういうことなのかを。ハンスは世界的大犯罪者。世界中で大犯罪を犯し、指名手配されている。誰もがハンスに対して恐怖している世の中。そんな時代にハンスがなにも知らない一般人の前に現れればパニックになるのは必須。そして、また前のような事件へと発展する可能性も出てくる。

葵の母親はこうしてたびたびハンスと葵が会っているのは知らないし、ましてや一度偶然会ったいや、目撃したという状況からハンスとの関わりは一切ないと思っている。

葵の母親もまた一人娘を心配する親。葵とハンスが関わり合っていることを知ったら葵の母親はどう思うだろう。そういうさまざまな不安を胸に、葵は祖父の本当の気持ちを知らるために家族に連絡した。

第十二話 決意（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

この作品をここまで読んでいただけるなんて、感動です。最後までお付き合いいただけると幸いです。

第十三話 涙

祖父のいる病室にあるスライド式の大きなドア。その前には葵が立ち家族が到着するのを待っている。するとそこには家族が現れた。葵には両親と祖母がいる。父親は海外に仕事で行っているのだから今帰ってくることは出来ない。だから今来ているのは葵の母親と祖父の妻である祖母だけである。

「葵、どうしたの？ 急に呼び出したりして」

葵の母親は急に葵に病院に呼び出されたことではなにかあったのではないかと心配になっていた。そのため少し息が切れている。少し急いできたようだ。

「驚かないでね」

葵の母親と祖母は葵のその言葉に疑問を抱きながら葵の後に続いて病室へと入っていく。そこにはベッドで寝ている祖父とそしてその横には立ったまま祖父を見ているハンスの姿があった。

母親と祖母は驚き、思わず声を上げそうになる。

「叫ばないでっー!!」

しかし、葵の一声に驚き、声を上げることなく葵のほうを見る。ハンスも視線を葵のほうに向けた。相変わらず母親と祖母は驚きとハンスを目の前にして怯えているように見える。

「ど、どうということなの葵？ ハンスとは関わってないって」

「ごめんなさい。でも今は彼が必要な。彼にしかできないことがここにあるから」

葵の言葉に母親と両親は疑問符を浮かべる。まだ状況がよく分かっていない。それもそのはずだ。今、目の前にいるのは世界的大犯罪者。殺人や強盗などの凶悪犯罪を犯している人間を目の前にして考えられる出来ることと言ったら殺すなどの行為しか思い浮かばないだろう。下手をすると自分も殺されるかもしれないという恐怖と共に。

しかし、葵の言葉に驚いているのはハンスも同じだった。いままで人から必要とされたことなんて一度もなかった。人から忌み嫌われ化け物扱いされ、ゴミを見るような眼で見られ、人の心の闇の部分だけを見てきたハンスは、今初めて自分しか出来ないこと、そして自分を本気で必要としてくれている人に出会えた。

「お母さん達も彼の能力は知っているでしょう？ 人の心を垣間見る能力……」

「でも葵、あなたそんな能力は信じないって」

「最初は信じていなかった。でも、彼と何度か会ったうちに彼の心を垣間見る能力も彼自身のことも信じる事が出来るようになっていった。彼は確かに世界的大犯罪者だけど、彼も心を持った人間なの」

葵の言葉にハンスは相変わらずの無表情だったが、内心驚いていた。いままで人から信じてもらったことなんてなかった。それ以前に人から信じてもらおうともしなかった。幼い頃に友達に裏切られ、親に裏切られ信じるなんて言葉はハンスにとってただの戯言でしか

なかった。でも今ここに本気で自分を信じて、必要としてくれる人がいる。そんな人を目の前にしてハンスにはいままでにない感覚が目覚めようとしていた。

また、葵の母親や祖母も驚いている。ハンスのことはテレビの中の自分達とは特別関わりのないことだと思っていた。それなのにいつのまにか自分の娘がハンスと何度も会い、そして世界的犯罪者であるハンスを信じる事が出来るようになるほどの仲になっていたからだ。

葵の母親は思った。なんとしても世界的犯罪者から娘を守らなければと。危険で命すら亡くす可能性のある犯罪者ハンスから。

「今から、ハンスにおじいちゃんの心の代弁をしてもらうわ」

「代弁……？」

葵の言葉を聞いたハンスは祖父のほうを見る。祖父も目でハンスのほうを見る。

「さあ、話せ。お前の心の代弁をしてやる」

「……洋子。疑う必要も、守る必要もない。彼は大丈夫だ」

葵の母親は驚いた。ハンスの口から自分の名前が出てきたからだ。ハンスには当然名乗った覚えはない葵の母親は驚きと不安を醸し出していた。

「覚えているか？ 昔、まだお前が小学生の頃、いつもイジメられ

て泣いてばかりいた頃のことを。あの時言った言葉を。『洋子。どんなにイジメられても人を信じる心を忘れてはいけない』と言ったことを』

「……！ どうして、そのことを？」

それは葵の母親の過去の出来事。当時葵の母親はクラスの間からイジメを受けていた。学校にいけばイジメられるからと泣いてばかりいて、ついには学校に行くことさえなくなっていた。そんな時に葵の母親にとっての父親が言った言葉がそれだった。もちろんそのことは葵は知らない。葵の祖母も知らない。知っているのは祖父と母親の二人だけだった。ハンスがそのことを知っているはずがない。しかし、ハンスの口からその出来事のことが出てきて母親はただ、驚くしかなかった。

「お母さん、これはハンスの言葉じゃないの。全部おじいちゃん言葉なんだよ」

「……信じることなんて出来るわけじゃない」

とは言ったものの葵の母親は少しハンスの言葉を信じ始めていた。それは昔のことを言い当てられたからである。

「いえ、洋子。これは、あなたの父親のそして私の夫の言葉よ。この文脈は彼独特のもの。洋子、あなたも気がついてるはず」

それを言ったのは、葵の祖母だった。

『おまえも来ているのか。身体のはうは大丈夫か？』

葵の祖母はゆっくりと歩いて、祖父のほうへと行く。そして祖父のベッドの横までたどり着くと祖父の手を両手で握り締めた。

「ええ、大丈夫ですよ。あなたともう一度話が出るなんて夢のようです」

祖父は酸素マスクをつけているが、その口は笑っているようにみえた。もう一度話が出るなんて夢のようだ。そう思っているのは祖母だけではない。葵もそして半信半疑の母親も、そして祖父自身もこんな日がこようとは予想してはいなかった。

その後、ハンスは祖父の心の代弁をし続けた。祖父が満足するまでたくさんの言葉を代弁し続けた。そうしているうちに葵の母親も信じるようになり、葵も含め四人はとて久しぶりに笑いあった。

『……、葵。お前は俺の気持ちがかかっているのだろう』

楽しい会話を続けていた後、しばらくの沈黙があり、その沈黙の後祖父が突然言い始めた。それは葵が最も気になっていたことである。それは祖父は死にたいと思っているかどうかと言うこと。

『今、ここではっきり言わせてもらおう。俺は死にたい』

その言葉に葵も含めそこにいるハンス以外の人間は驚きの表情を浮かべた。

「どうしてそんなこと言うの？」

『もう、俺の身体は長くはない。こうしている今も激しい激痛が襲ってきている。気を抜けば気絶してしまうほどのな。最後にお前達

と話が出来てもう満足したとは言わない。出来ることならばもっと生きていたい』

「だったらなんで!？」

葵は祖父の顔を見て自らの目から涙が溢れてきているのが分かった。祖父の顔が涙で遮られよく見えない。しかし葵はその涙を拭くことなく祖父の顔を見る。

『もう生きることとは出来ないからだ。悲しいことだが、これが現実だ。俺の病は、もうどうしようもない。葵も理解しているだろう。もう助からないと。だから、俺が死ぬ前に話をしたいと思ったのだろうか？ 俺の病が治ってから話をしようとは思わなかったはずだ』

その言葉に葵は衝撃を受けた。認めたくなかった。頭では理解しても心で理解できなかった。現実と自分の心。それを祖父に言い当てられた。祖父は決して心が読める能力ちからがあるわけではない。しかし、葵のことも、そして他の家族のことも全部分かっていた。そして自分自身のこと。

だからこそ、この結論に達したのだろう。自分の病のせいで病院に見舞いにきては看病疲れでやせ細っていく家族の姿を見るのがどれほど辛いことか。出来ることならば、叫びたいほどの苦しみ。この苦しみから逃れる方法はひとつしか選択肢がなかった。

葵は涙を拭う。

『涙を拭う必要はない。ただ強く生きる。涙は強くなるための心の結晶なんだ』

その言葉に葵も葵の母親も祖母も全員が心に衝撃を受けた。

それは、祖母が辛いことがあった時、祖父がよく言っていた言葉。

それは、葵の母親がイジメられていた時、祖父が言った言葉。

そして、それは、葵が祖父から言われた言葉で最も印象に残っていた言葉。

みんな泣いた。

涙を拭うことなくただひたすら泣いた。泣けどその涙は渴きを知らないとばかりに溢れ続けた。

ハンスはその光景を目に焼き付けると、一人静かに部屋から出て行った。今日のこの出来事はハンスにとっても葵にとっても大きく大きく心が成長したのだろう。人は弱い。たくさんの人と話、いろんな人の影響を受けて育つ。それはいくつになっても同じこと。子供は大人に学び。大人は子供に学ぶ。そうして、心の成長をはかるのだ。

人は誰もが強くありたいと願う。それは弱肉強食の自然の摂理がそうさせるのか。それとも大切な人を守るためなのか。それは分からない。ただ人は弱さを知ることによって本当の強さを手に入れることができる。

涙は心から溢れ出た結晶なのだろう。時に悲しく溢れ、時に嬉しく溢れる。そうして人は涙の数だけ強くなっていく。ハンスにとっ

てもまた、そんな人の心に初めて触れた初めての瞬間だった。

第十三話 涙（後書き）

読んでいただきありがとうございます。次回で第二部も終了となります。よろしくお願ひします。

第十四話 空

葵は、今日病院から退院する。事故での怪我也ほとんど治り、祖父のこともありいろいろしなくてはならないことがあるからだ。葵は自分がいた大人数の病室の人達に挨拶をすると、部屋を出て、エレベーターに乗り、病院の外、つまり中庭へと出た。そこには、葵の母親が待っていた。

「ちゃんと、あいさつしてきた？」

「うん」

葵は笑顔で頷く。母親の問いに答えると葵はいつもハンスと会っていたベンチへと目をやった。今日もあのベンチには誰も座っていない。あそこはあまり人が近寄らないのだろうか。だからこそハンスと会うには丁度良い場所だったのかも知れない。

「お母さん、ちょっと先に行つてて」

葵は、母親にそう言つとベンチのほうに歩いていった。そしてベンチにたどり着くとベンチに腰を降ろし、目を瞑る。さわやかな風が髪を靡かせる。日当たりの良い木陰が心地よい。気を抜くと眠つてしまいそうな陽気。無心になつて自然に身を任せる。

「なにやつてんだ？」

その声に葵は目を開ける。その瞳には、木の葉の間で見え隠れするハンスの姿を捕らえていた。

「やっと、会えた」

あの日、祖父のことがあった二日後、祖父は死んだ。安楽死ではないが、痛みを少なくするための注射を打っていたため祖父の顔はとても幸せそうに安らかだった。そしてそれから数日。葵の退院の今日までハンスとは会ってはいなかった。

「ずっと聞きたかったんだけど、なんでおじいちゃんと話をさせてくれたの？」

「……同じだったから」

「同じ？」

「お前の祖父も俺と同じように死にたいと願っていたから。理由は違えど同じ気持ちを抱いている人間に共感を得た」

葵は、ハンスの言葉の前にハンスが言っていたことを思い出した。ハンスの目的は死ぬこと。この世界の全てを破壊する。そんなことをハンスは本気でやろうとしている。そのために世界中を犯罪の渦で巻き込んで恐怖の耐えない世界を創り上げている。

でもハンスのやろうとしている目的は一般にいう狂気ではない。

葵は感じていた。ハンスは確かに凶悪犯罪を犯し、世界的大犯罪者だ。だが、ハンスは異常殺人鬼でもなければ狂気に身を纏っているわけでもない。ハンスそのものに噂ほどの脅威は感じないし、それどころかハンスを包む空間は穏やかそのもの。今こうしているこの時間、この空間はなんて平和なんだろうか。本気でそう思っ

まうほどにハンスの目的と雰囲気は一致していない。

だが、葵はほんの少しだけ気がついていた。

なぜハンスに脅威を感じないのか。それはハンスの心があまりにも。

葵がハンスの心を本当に理解するためにはどうしてもハンスに聞きたいことがあった。ハンスが葵に興味を持ち知りたいと思ったように、葵もハンスを知りたいと願っている。そして、その心を理解しようと葵はハンスに問う。

「ハンス、いえ翔。あたしにはいまだにあなたの目的の真相が理解できない。あなたの過去には一体なにがあったの？ なにがあなたをそこまで駆り立てるの？」

葵の言葉を聞いたハンスは一瞬悲しそうな目をした。

「……お前が知る必要はない」

「あなただったらそう言うと思った」

葵はベンチから立ち上がるとゆっくり歩き出しベンチから離れていく。

「また会えるよね？」

ハンスは葵の問いになにも答えない。葵はハンスのほうを向く。

「あなたの過去、気が向いたらその時は教えてね」

葵は笑顔でそう言うと、母親の待つ病院の入り口へと急いで向かった。ハンスは葵の姿が見えなくなるまでその後姿を目で追っていた。

ここ最近、とても陽気がいい。今日もまた、青く澄み切った空が晴天をかざしている。

こんな日は、木陰で休むのも、またいい。

第十四話 空（後書き）

読んでいただきありがとうございます。これにて第二部は終了です。次回より最終の第三部を掲載していきます。最後までぜひよろしくお願ひします。

第十五話 過去

雲ひとつない晴天の闇に、三日月が浮かんでいる。まるでこれから起こることを見透かしているかのように。

ここは、高層ビルの屋上、避雷針のある屋上は、今にも倒れそうなくらいの強風が吹き荒れている。そんな屋上に一人の男が立っていた。男にとってこの場所は自分の目的を再確認するのに最適だった。

この位置からは町並みが全て見える。人類が長きに渡って気付きあげてきた営みが見える。大量のビル郡、その隙間を縫うように走る車、さらにその間を歩く人。夜であろうと決して光を失わない人類の繁栄の営み。

これだけの文明を築き上げるのにどれだけの時間と労力を費やしたのだろう。しかし、それが崩れるのはほんの一瞬だ。築き上げた時間など無意味と言わんばかりにまるで泡となって消えるように一瞬で全ては崩壊する。

それは、人の心もまた同じ。

長い時間を使って築いてきたはずの心は、非常に脆く、ほんの一瞬で全てが崩壊する。

それは何気ないたった一言。人が壊れるのには、全てを失うのはその一言で十分だった。

『あの子は、普通じゃないから』

そう男は言われ続けてきた。特異な能力ちからを持つために、世間から迫害され、親からも突き放され、孤独と悲しみと憎しみをもち、この世界の闇を見てきた男は、自身の手で世界にさらなる闇をもたらした。

全ては過去の結果。過去は未来へと繋ぐ貴重な出来事。そして人の心を繋ぐ全ての時間。

それは遡る事、十数年前。

柊翔は、その特異な能力を気味悪がられ、親に捨てられた。まだ幼い子供である彼に、生活力などあるはずもなく、気がつけばある施設で生活していた。そこは、他にも柊翔と同じように親に捨てられたもの、親を亡くしたものが集まるいわゆる孤児院が集まる施設、孤児院だった。

柊翔は、そこでも孤独だった。親に捨てられ人を信じる事が出来なくなった彼は、自ら進んで人と関わろうとはしなかった。でも、そんな彼に寄ってくる一人の男の子がいた。年齢は柊翔と同じ、彼もまた親に捨てられ、この孤児院に拾われた子供の一人である。

はじめから仲が良かったわけではない。彼が関わってこようとしても柊翔はそれを拒否したからだ。それでも彼は諦めず柊翔に近寄っていった。そんな日が何ヶ月も続くと柊翔にも彼に対する心の開放が訪れた。柊翔は彼に心を許し、彼とのみ話すようになっていった。

しかし、仲が良くなるに連れて柊翔にはある悩みが出来てくる。それは、自分が忌み嫌われるきつかけとなった能力、『心を垣間見る能力』。それを打ち明けるべきか否か。自分は人の心を読める。それを知った人間はみんな自分から離れていった。彼もまた同じではないか。そう思い悩み始めていた。けど、柊翔には、そんな彼の心が読める。彼はいつも純粹に柊翔と接している。それを知っていた柊翔は、彼に自分の特異な能力を打ち明けた。

結果、彼はなにも変わらなかった。嫌うこともなく、怯えることもなく、今までと同じように仲良く接していた。それは柊翔にとつてどれだけ幸せなことだっただろう。親でさえ見捨てた能力、それを理解し、恐れず接してくれる彼の存在は柊翔にとって、はじめて心の底から信頼できる人間、親友となつて柊翔の心にしつかりと刻まれる。

だが、二人の運命を分かつ時は唐突に、なんの前触れもなくやってくる。

孤児院に、柊翔が唯一親友と認め心から許せる男の子、悠ゆうの母親がやってきたのだ。幼い時に捨てられた悠は、ほとんど親のことを憶えてはいなかった。しかし、直感ですぐに自分の本当の母親だということを感じ取ることが出来た。

柊翔も、複雑な気持ちではあつたが二人の再会を喜んだ。初めて心から許せる相手ができ、別れることは少し嫌だったが、それでも大親友が幸せになってくれるのならと悠を心から祝福したのだ。

だが、柊翔はその時、あつてはならない光景と心を目の当たりにした。

悠の母親は、とても嬉しそうにしている。悠をもう離さまいとしっかりと抱きしめている。眼からは涙を流し、その手でしっかりと悠を抱きしめている。だが、その心は汚れていた。

悠の母親は、悠を引き取りに来たのではない。悠を人身売買で売り飛ばし、大金を手に入れるために悠のところにやってきたのだ。柊翔の心を垣間見る能力はそれを瞬時に見抜いた。

さすがに、その時ばかりは自分の能力を疑った。これは間違いだと、そんな事があるはずがないと、必死に自分の心を否定した。だが、無情にもその能力は柊翔に悠の母親の心を読み取らせた。

柊翔は、その時始めて思ったのだろう。人の心とはここまで汚れているのだということ。人を例えそれが我が子であっても、人を人と思わない心が存在する。自分の母親は特別だと思っていた。こんな特異な能力を持つ自分だからこそ忌み嫌われるだと思っていた。だからこそ、自分は半ば諦めていた。所詮この世は自分を必要としていない。今後、人とも何者とも関わらず、ひっそりと生きていくのが自分の人生だと。

そんな時に現れた、親友。悠を守らなければならない。柊翔の心は、親友の幸せを本気で願っていた心は、彼を行動に移させるには充分な理由だった。柊翔は悠の母親に悠の目の前で真実を言った。悠の母親が考えていることをすべて話したのだ。当然、悠も悠の母親もとても驚いていた。

悠の母親は、柊翔を睨みつけた。その眼は今まで自分が浴びてきたとても嫌な目。だが、親友を助けるためにその眼を浴びせられることさえもいとわない。悠は柊翔を信じ、ここに残る。そう思っていた。だが……。

悠もまた、柊翔に忌み嫌う目を向けた。悠のその目は柊翔を信じていない眼。それは恨みでもなければ、復讐に燃えているわけでもない。ただ、冷たく、人を信じない。冷徹な眼。

柊翔は驚いた。親友の悠から向けられたその目に。そしてその心に。自分にとって心から許せる大親友の悠は自分よりも母親を信じたのだ。醜い心を持った母親を。翔にはそれは信じられないことだった。悠は自分を信じてくれていると思っていた。だからこそ、悠を守りたいと思った。だが、悠は自分を信じてはいなかった。

だが、まだ幼かった翔の心はそれを認めようとしなかった。全ては悠の母親が悪い、悠の母親さえ現れなければ、悠は不幸になることもなく、自分を信じぬこともなく、二人は幸せな時を過ごせるはずだった。悠の母親さえ現れなければ。悠の母親さえいなくなれば、悠を助けることも出来る。

次の瞬間。

柊翔は、悠の母親にナイフを突き刺していた。悠の目の前で。自分の心を信じて。

ナイフを刺された悠の母親は、その場でうずくまり、大量の血を流して動かなくなった。悠は発狂した。目の前で起きた出来事、事実に驚き慄き狂ったように声を上げた。翔もまた、自分がしたこと、に驚きはしていたもののこれで悠を、親友を守ることが出来たと満足を得ることが出来た。

だが、悠から翔に向けれた言葉は【化け物】。そしてその眼は、その心は幼き心には似合わない殺意に満ちていた。異常事態がおき

ていることに気がついた院は、柊翔と悠を取り押さえ、救急車と警察を呼んだ。そして、柊翔は警察と共に、連れて行かれた。

後に、柊翔は警察を脱走。その後行方知らずとなった。そして、悠も院から姿を消した。

純粹で、なんの汚れもなかったその心は、人の闇を見ることによって、汚れた。一度はその心に純粹さを取り戻そうとしたが、再び訪れた闇によって、その心は二度と戻ることのない深い深い闇へと堕ちていった。柊翔の過去に巣くう人の闇の部分。どれだけ、人を信じようとも無駄だということ。様々な要因が作り出した人物。それが、ハート・グランズ。

ハンス。

そして、ハンスは自らの心に従うことにした。闇に汚れた自らの心に。人は汚れている。人は醜い。それらを隠すことなくハンスはその事実に従い、世界中で犯罪を犯す大犯罪者となった。世の中は闇に染まっている。こんな人を悲しみに包む世界なんかいない。ならば自らが、世界を闇で覆い、全てを消してしまおう。そして、自らも死を選び。全ての物事に終焉を……。

それが、化け物と呼ばれ、世間から忌み嫌われてきた自分にできる唯一の世界を救う方法。

第十五話 過去（後書き）

読んで頂きありがとうございます。今回よりいよいよ第三部（最終部）へと入ります。最後まで読んでいただけると幸いです。

第十六話 手がかり

葵の祖父が亡くなって数ヶ月。あの日以来、ハンスに関するニュースは流れなくなった。それはつまり、ハンスはこの数ヶ月、一切犯罪を行っていないことを示す。ハンスは犯罪を犯すときの法則と言うか、決まりのようなものを持っている。

それは、必ず、どんな状況であろうと自分の姿をその場にいる人間に晒しだす。それは、自分がやったということを誇示しているのか。それとも自分の恐怖を世間に知らしめるためなのか。とにかくハンスは必ず姿を現す。だから、ハンスが行った犯罪は必ずハンスがやったと分かるのだ。

葵は、今日も相変わらず自宅のソファで介護の勉強をしながら、テレビを見ている。葵はハンスと出会って以来、ニュースをよく見るようになった。いつ、どこでハンスに関するニュースが流れるかわからない。それを即座に知るために葵は出来る限りニュースを見るようにしているのだ。

葵はあの日以来、ハンスの過去がとても気になっていた。あそこまで、心が闇に染まるほどの過去。他の人には理解できないほどの苦しみや辛さを味わってきたのだろうか。興味や好奇心ではない。ただ、純粹にハンスの過去を知りたいと思っていた。

そんなことを考えながら勉強をしていると、ニュースに突然、緊急特番が流れた。その内容は、飛行機が落とされたというのだ。テ

レビでは、事故ではなく、人為的に引き起こされた事件だと言っている。そして、その犯行の手口はハンスそのもの。しかし、テレビではこうも言っている。『ハンスの姿は目撃されていません』と。

犯行の現場では必ず姿を現してきたハンスが始めて姿を現さなかったのだ。葵はその事実疑問を抱きながら、あることを思い出した。ハンスの過去を知るために出来ること。それに適した人物が一人いた。葵はそれを思い出しはしたが、その人物に会いに行くことに躊躇いを感じていた。だが、それでも、ハンスの過去を知るために、葵が持つ手がかりと言えば、それしかないのも事実。葵は意を決してその人物に会いに行くことを決めた。

次の日、葵は朝から電車を乗り継ぎ、その人物がいる場所へと向かった。向かった場所は留置所。そう、かつてハンスを捕まえるために、葵を利用したあの元刑事のところである。ハンスを捕まえるために、葵の心が読めないと言うハンスの行動を即座に察知し、犯罪を犯してでもハンスを捕まえようとした執念。あの刑事ならばハンスの過去について知っていると考えたからだ。

留置所に着いた葵は、少し緊張な面持ちのまま、受付で書類を提出し、係りの人の後について面談室へと向かった。もちろん葵があの元刑事に会うのはあの事件があった時以来である。葵の心臓はとても鼓動が激しくなり、緊張しているのが手に取るように分かる。葵は椅子に座り彼が出てくるのを待っている。

しばらく待っていると、奥のドアが開き、あの刑事が出てきた。刑事は葵の前にあるガラス越しに用意されていた椅子に座り葵のほうを見る。二人の間にはしばしの沈黙が流れた。それは、緊張からだろうか、それとも恐怖からだろうか。そんな沈黙をやぶったのは刑事のほうだった。刑事は座ってた椅子から突然立ち上がり、頭を

下げた。

「すまなかった。許してもらえとは思っていない。ただ……ほんとうにすまなかった」

葵は刑事のその突然の行動に驚いた。

「ずっと、君にあの時のことを謝りたかった。あの時、私はどうかしていた。ほんとうにすまない」

「……刑事さん。もういいですよ。あたしは大丈夫です。頭を上げてください」

そう言われた後も刑事はしばらく頭を下げていたが、ほどなく時間経つと頭を上げた。

「今日は、刑事さんに聞きたいことがあって訪ねたんです。座ってください」

刑事は再び椅子に座ると、葵のほうを見た。

「聞きたいこと？」

「実は、ハンスのことについて」

葵はその刑事にハンスの過去を知りたいということを伝えた。そして、それを知るためにここへ来たのだと。

「そうか。ハンスの過去を。……本来は、こんなことは言うては駄目なんだけど。あんな目に合わせてしまったお詫びとして、特別に

教えるよ。ただ私もハンスの過去について詳しくは知らない。……
ハンスは孤児だったんだ」

「え？」

「ハンスは幼い時に親に捨てられた。そして孤児院で拾われそこでしばらく生活をしていたんだ。その時、ある事件を犯し、姿を消した」

「ある事件？」

「詳しくは、孤児院にいつて聞くといい。今もまだあるはずだから、連絡先と地図を描いてあげるよ」

そう言うつと、刑事は後ろの刑事から紙とペンを借りて、連絡先と孤児院への地図を描いた。そして、それを葵に渡した。

「ありがとうございました」

面会の終了時間になったため、元刑事は椅子から立ち上がり、面談室から去ろうとした。

「……刑事さん。あたしは、刑事さんの仕事のことをよく知らないし、この世界の事情もよくわかっていないただの一般人だけど。ハンスも、同じ人間なんです。彼にも心がある。それを分かってあげてください」

刑事は葵の言葉に立ち止まり、葵のほうを向いた。

「ここを出たら、もう一度、一からやり直すつもりだ。君には本当

に申し訳ないことをした。これからはもっと人のことを、人の気持ち、心をしっかり見ていくことにするよ。そうすることで今まで見えていなかったものが見えてくる気がする」

「……そうですね。今日は本当にありがとうございました」

葵は緊張の糸が全てほどけたかのような笑顔で言った。

「こちらこそ、ありがとう」

そついい残し、刑事は面談室から去っていった。葵も面談室からそして留置所から出て行った。その手にはハンスの過去へと繋がる確かな手がかりがしっかりと握られていた。

第十六話 手がかり（後書き）

読んで頂き本当にありがとうございます。

最終話まで後少しです。ついに物語は翔の確信部分へと向かいます。
これからもよろしく願います

第十七話 孤児院

そこからは、山が多く見えた。都会から少しばかり離れた場所にソレは存在する。

葵は、電車を乗り継ぎその場所へとやってきた。そこは人気のほとんどない田舎。都会とは違う、田んぼの匂いや新鮮な空気の匂いが清々しい。気持ちが良い陽気に励まされ葵は目的の場所へと足を進めた。

しばらく足を進めると、目的の場所が見えてきた。葵は途中で買った飲み物をバッグにしまつとその場所へと近づいていった。

そこは、かつて柊翔が過ごした場所。

その孤児院は、田舎だということを利用してか。とても広々としている。正門だと思われる所から中を覗くと、教会とも、屋敷ともとれる少しばかり大きな建物が姿を現した。庭には、幾人かの子供の姿が見える。どうやらこの場所で間違いないようだ。

葵は、その孤児院に足を踏み入れると、外で遊んでいた子供の一人に声をかける。

「こんにちわ。みちこさん……マミーはいるかな？」

葵に声をかけられた子供は、葵の姿を確認するとなにも言わず建物の中に入っていった。しばらくするとその子供が一人の女性を連れてきた。

「あら、いらしたの。待つてましたわ。さあ中へどうぞ」

葵は元刑事に教えてもらった連絡先を使ってあらかじめこの孤児院に電話をかけていた。そして事情を話、実際にこの場所を訪れることを知らせていた。柊翔が拾われ、育ったこの孤児院に。

中に入ると、葵は椅子に座らされた。先ほどマミーと言われたみちこという女性は、奥へ行き、飲み物を持って再び現れると、葵に飲み物を渡し、自らも椅子へと座った。葵は先ほどまで自分で買った飲み物を飲んでいたのでそれほど喉が渴いていなかったが、とりあえず一口だけのみコップを置いた。

「お忙しいところ突然すいません」

「いえいえ、刑事さん以外でここにあの子のことを聞きにきたのはあなたが始めてですよ。失礼だけど、あの子とはどういう関係なんですか？ 恋人さん？」

見た目は、清楚で落ち着きのある老女だが、その言動には若々しさを感じられるみちこの発言に葵は少し戸惑いながら答えた。

「いえ、そんなんじゃないですね。ただ、少しだけ彼のことを知っているだけです」

「……あの子、ハンスは世界を荒らしまわる大犯罪者。ここで育ったということで警察の人がいろいろ聞きにきます」

「みちこさん。……あたしが知りたいのはハンスのことじゃありません。柊翔のことです」

その葵の発言にみちこは少し笑顔となった。

「ごめんなさい。ついね。……あの子、翔君はとても大人しい子でした。大人しいとは違うのかも知れないけど、誰にも心を開かず、ただいつも一人でいることが多い子でした。ただ、そんな翔君に近づいていった子がいて、悠君って言うんですけど、彼は翔君とは間逆の性格でとても明るいい子でした。親に捨てられたなんてそんな事実信じていないかのように。いつか、親が迎えに来ることを信じきってるくらいに。この院でも飛びつきり明るいい子でした。でも、そんな彼らがあんなことになるなんて」

みちこは、柊翔と悠との間に起きた出来事を話した。翔がハンスへと変わる全ての元凶。葵はみちこが話すその内容を一期一句漏らさないようにしっかりと聞いて、頭に入れていった。

みちこの話を聞き終わった葵は少し悲しそうな表情を見せた。誰よりも辛い出来事を経験してきたその幼き心が受けた痛み、それは彼にとって生きる意味であると同時に死ぬ意味にもなつて、彼を突き動かす。決して停まることを許されない。その行動は、その動機は、その目的は、全てその過去一点へと繋がる。

「翔は、なにを求めてるんでしょうか？」

「世間は、翔君をハンスとし、大犯罪者として扱い、彼に恐怖を抱いています。でも、あなたは気がついてるでしょう？ 犯罪者ではなく人間としての彼の本当のやさしさに。そして、彼が求めているものにも。だから、あなたはここへ来た。それを確かめるために……答えはできましたか？」

葵はしばらく考え込んだ後、無言で頭を縦に振った。

「そうですか。よかった。では、私から一つお願いしてもいいですか？」

「おねがい？」

葵はみちこのその言葉に疑問を抱いた。

「翔君を救ってあげてください。あなたも知つての通り、彼の心は今、深い深い闇の底にいます。彼を救えるのは本当の彼を知っているあなただけです。彼もきっと、それを望んでいます。だから、彼はあなたに近づいた。全てを判断する前に、最後の望みとして」

その言葉に葵はハツとした。柊翔も言っていた。最後に葵に賭けると。その言葉の真意。本当の意味。それは、世界を破滅させるかどうかではない。柊翔自身も恐らくは気がついていないだろう。それは自分を救えるもの。深い深い闇の底から、手を差し伸べ、光ある世界へと導いてくれる人。それが柊翔の本当の望み。

やはり、柊翔も人間なのだ。過去にたくさんの裏切りを経験し、心を闇に閉ざした彼も、本当に信じられる人間を求めていた。ただ、なぜ、柊翔はその人間に葵を選んだのか。それは柊翔のみが知る真実。

「……みちこさん。もっといろいろ翔のことを教えてください。どんな些細な事でもいいです。彼はどんな食べ物が好きで、どんな場所が好きで、どんな風に生きてきたのか。彼のことをもっと知りたい」

葵の表情は満面の笑みになっている。みちこはそんな葵の表情を

見て、微笑ましい表情をしながら、翔のことについて覚えていることの全てを話だした。

何時間たっただろうか。気がつくとも陽は暮れて辺りは薄暗くなってきた。柊翔の話題で盛り上がった二人は時間が経つのも忘れ話をした。

「あら、もうこんな時間。子供達に、夕ご飯の時間だと伝えなくては」

みちこは思い立ったように言う。

「葵さん、もうこんな時間ですし、今日は泊まっていけたらどうです？ ご飯も用意させていただきます」

「あ、ほんとですか。有難うございます。じゃあ、あたしにも夕ご飯のお手伝いをさせてください。料理の腕には自信がないですけど」

「ふふ、じゃあ、お願いします」

葵は、出されていた飲み物を全て飲みほすとそのコップを持って台所へ向かう。みちこの後へと続いた。

孤児院の正門。そこに一人の男が現れた。

「ここも久しぶりだな。マミーは元気かな？」

男の表情には笑みがこぼれている。でもその笑みはまるで幻だっ

たかのようにすぐに消え去った。

「……でも、僕の目的のため、マミーあんたには犠牲になってもらうよ」

そして、男は孤児院の中へと足を踏み入れた。

第十七話 孤児院（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第十八話 悠

一人の女性がドアを開けて部屋の中へと入ってきた。

「子供達はすっかりと寝静まりました」

「お疲れ様です」

部屋に入ってきたのはみちこだった。葵は部屋にある椅子に座りコーヒーを飲みながらテレビを見ている。みちこも自分でコーヒーを入れると、葵の近くにある椅子へと座った。

「今日は来ていただいて有難うございます。少し気分転換が出来ました」

「いえ、こちらこそいろいろお忙しい中いろいろ聞かせていただいて有難うございます」

葵とみちこがそんな他愛ない会話をしていると、突如正面玄関のほうで物音がした。みちこはその音に気がつき、様子を見るためにコーヒーを机に置いて部屋を出た。葵はその様子を目で追っていた。

しばらく時間が経ったが戻ってこないみちこの様子が気になり葵は、様子を見るために飲み干したコーヒーを机に置いて部屋を出た。部屋を出ると、そこにはみちこ一人の男性が立っていた。

男性は、葵に気がつくやと軽く頭を下げた。その男性は、髪は真っ白で、長髪。目が輝きを持っていないようなそんな雰囲気を持っている。そして、白い一張羅を身に纏っている。みちこも葵の存在に

気がつき、葵の元へとやってきた。

「葵さん、すいません。つい話しこんでしまつて。紹介します。彼が今日、話した悠君です」

みちこはとても嬉しそうに紹介する。恐らく会つたのは久しぶりなのだろう。みちこは少しテンションが上がっている。

「悠君、彼女はね。翔君の知り合いで、ここまで遙々翔君の幼少時代の話を聞きに来たのよ。その話の過程であなただけの話したの。悠君って言う翔君と仲良しだった子がいるって」

「だった……か。やっぱり、マミーは僕らのことを良く分かつている。さすがは僕らを育ててくれた僕らの母親だ」

葵は少し違和感を感じていた。悠の顔は笑っている。笑みが零れている。久しぶりに会つた育ての親。嬉しいはずなのに、話に聞いていた明るさはどこにもない。それは、昔、翔との間にあつた出来事が彼の心の奥底に深い傷を作ってしまったからだだろうか。

「君、葵さん……だってね。翔の知り合いなんですよ？ だったら、翔に伝えてよ」

「え？」

葵が何を伝えるのかと疑問を感じつい出てしまつた疑問をあらわす言葉を発した瞬間。悠は一瞬にして、みちこの背後から手に持っていたナイフをみちこの首へと近づけた。

「マミーを返してほしければ、例の場所へと来いって、ね」

「ゆ、悠君？ どうして？」

みちこのその言葉に悠はゆっくりとみちこの方を見た。

「ごめんねママー。でも僕の目的のためあなたには犠牲になってもらうよ」

「もく…てき？」

「そう。僕は、あの日からずっと、彼を殺すことだけを考えて生きてきた。翔に気がついてもらえるように飛行機も僕が落としたんだ。翔のような手口で。分かるでしょ。だからこの孤児院も出て彼を探し続けた。僕の目の前で僕の母さんを殺し、今ものうのうと生きているあの『化け物』を」

葵はただ驚いた。目の前で起こっている現実に。

「悠君、憎しみや復讐なんかじゃ……なにも解決しないわ」

「そんな、月並みの言葉は聞き飽きたよ。僕の心は彼をこの手で殺さないと永遠に晴れない。僕の心のこととは僕自身が一番良く分かっている。人の心が読めるなんて気味の悪い能力を持っている化け物よりね」

そう言つと今度は葵のほうを見た。

「分かったね。翔に僕のことを話すんだ。そして例の場所と言えばすぐに分かる」

そう言つと、悠は後ろに少しずつ下がりはじめた。みちこも一緒に引き連れて。

「待って！ 彼は人を信用してない。みちこさんを人質にとつても彼は来ないわよ」

その言葉に悠はゆつたりと笑みを浮かべた。

「なにも分かっていないね。翔は来るよ。必ずね。僕は誰よりもあいつのことをわかってる。翔の気持ちを考えたら動かないはずがない。……だから伝えるのは君の役目だ」

そう言つと、悠はゆつくりと闇の中へと消えていった。葵は腰を抜かしてその場に座り込んでしまった。

第十八話 悠（後書き）

読んでいただきありがとうございます。残すところ後少し、いよいよ物語は佳境に入ります。

第十九話 再会

柊翔が育った孤児院。そこに突然現れた翔のかつての親友、悠。

そして、悠は自分の育ての母であるみちこを誘拐した。翔に会うために。葵は悠に恐怖を感じていた。かつて葵をさらった刑事と同じ。いや、それ以上の恐怖を。彼のその狂気を踏まえた心に。

葵はみちこがさらわれたことを翔に伝えなくてはならない。しかし、葵はどうやって翔に会ったらいいか分からなかった。いままでは、翔のほうから会いに来てくれていた。自分から会いにいくと思うことはあっても結局翔が会いにこなければ会うことなどできなかった。そして、今回も。葵は翔の所在を知らないため翔に会うことはできなかった。そして、それに悩み結局孤児院から動くことができなかった。

「わざわざ、こんなところまで来たと思ったら人の過去を探ってたのか？」

その声にうずくまっていた葵は顔を上げた。そこには、柊翔が立っていた。やはり彼は今回もそこにいた。いつも葵が彼を必要としている時、柊翔は傍にいる。

「し……翔。大変なの！ みちこさんが、マミーが！」

「分かってるよ。一部始終を見ていたからな」

慌てふためく葵をよそに翔は冷静だ。この冷静さは、この世界で生き抜くためには必要不可欠なのかもしれない。翔は感情に身をゆ

だねない。常に冷静に物事を捉える。いや、翔は感情を完全に隠しているのだ。硬い硬い殻のさらにその奥底に。感情をさらけ出すことは直接死に繋がることを翔は知っていた。

「見てたの？ だったらなんで止めてくれなかったの？ みちこさんは連れて行かれたんだよ」

「いちいち動揺するな。大丈夫だ。あいつも、悠もここで育ったんだ。分かってるさ。だから、葵。お前はここで待て」

葵は、始めて自分の名前を翔が呼んだことに驚いたが、それ以上に聞きたかったことがあったのでその言葉を胸にしまい、翔に聞いた。

「分かってるってどういうこと？ 待てって、悠が行った場所は分かっているの？」

「もちろんだ。全てのことに決着をつけて、俺は必ず帰ってくる。だから、お前はここで待て」

「待って。じゃあ、あたしも一緒に……」

「駄目だ。これは、俺と悠の問題だ。おまえが口を挟む隙間はない。……子供達を頼む」

そうここには、子供達がいる。みちこがいない今、葵が出て行けば、そこには子供達しか残らない。それはあまりにも危険だ。葵一人でも残れば危険度はグッと下がる。翔はそこまで考えていた。

「分かった。でも、約束してよね。必ずここに帰ってくるって」

「ああ、約束するよ。そして、帰ってきたらお前にいいたいことがある」

「いいたいこと？」

翔は後ろを向き、表のほうへと歩きだした。

「子供達は頼んだ」

そついい残し、柊翔は彼方へと消えていった。

葵は感じていた。翔は変わった。最初会った時の、嫌な感じはない。とても穏やかで、まるで心地よい風が吹き抜けるようにその心は澄み切っている。葵は素直にそう感じた。ただそれでも翔は笑わない。決してその素顔を見せてはくれない。これからの時間で翔がその表情を見せるときはくるのだろうか。

ここはとある倉庫。かつて翔と悠が秘密基地として一緒に遊んでいた場所。そこは何年も使用されていないのだろう。かなりガタがきていて朽ち果てる寸前のような風貌だ。その倉庫の端つこには鉄鋼が積み重なっている。そしてその鉄鋼に腰掛けるのはかつてここで翔と共に遊んだ親友。悠。

突如、倉庫の屋根が激しい轟音と共に爆風を巻き上げて崩れ落ちた。屋根の破片が地面へと落ちていく。地面に落ちた破片が砂煙を

巻き上げる。しかし砂煙は徐々に晴れ、そこには一人の人物が立っていた。

「来たね。……久しぶりだね。翔」

そこに立っていたのは世界的大犯罪者ハンスではなく、一人の間、柊翔だった。

そして、彼らが顔を合わすのは何年ぶりだろうか。あの日、全てが変わったあの日以来。彼らは互いに互いの人生を歩んできた。翔は、世界を闇の世界へと変貌させようと大犯罪者になり、悠は、翔を殺すことだけを考え。

「変わったな。悠」

「当たり前だろ。アレから何年経つてると思ってるんだい？ 見た目も変わるさ。見てよ。この倉庫の変わり様。僕達が秘密基地として使ってた頃とは比べようもないくらいに朽ちている」

そう言いながら悠は倉庫を見渡す。

「俺が言ってるのは見た目じゃない。心の方だ」

「例の……人の心を垣間見る能力ってやつかい？ でもね。言わなくても分かっていると思うけど、僕は心を変えたつもりはないよ。僕の心は君が変えたんだ。だから、他人事みたいに言うなよ。僕らは……親友だろ？」

彼らの歩んできた人生の、宿命は今、ここに訪れた。

第十九話 再会（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ついに宿命の出会い。いよいよ最後が近くなってきました。ぜひ最後までお付き合いください。

第二十話 闘い

「それにしても、本当に久しぶりだね。せっかくだから、思い出話でもしながら、少し遊ぼうよ。昔ここでよくやったでしょ？ 木の棒を使ってチャンバラごっことか。ただし、今回は命をかけた遊びだけだ」

そう言うのと、悠は後ろに隠しておいた刀を翔へと放り投げた。投げられた刀は翔の目の前の地面へと突き刺さった。

「さ、手にとりなよ。しっかり動かないと、話もできない身体になっちゃうよ」

そう言うのと、悠は鉄鋼から腰を上げ翔のほうへと持っていたもう一つの刀を振りかざしながら向かっていった。翔も悠のその行動に刀を取り構える。そして、刀と刀は接触し、切り風音と共に火花が散った。しかし、それに怯む事もなく悠は次から次へと翔に向かって刀を振り続ける。そのたびに激しい音と、火花がまるで花火を乱舞するかのように踊り狂った炎のように木霊する。

「どうしたの？ 受けてばかりじゃ面白くないよ。それとも、僕の動きはその心を垣間見る能力で見切ってるから反撃する必要はないって思ってる？」

激しくぶつかり合った刀同士の影響で、翔は後ろへとはじき飛ばされる。

「もし、そう思ってるなら、それほど甘い考えはないよ」

そう言つと、悠はいままでにはないほどのスピードでその間合いをつめた。そして、刀を横なぎに振り払うと、翔の腹部を目掛けて斬り放った。翔はそれを紙一重で避けることに成功したものの腹部に浅い傷を作ってしまった。斬りつけられた腹部からは紅い血がにじみ出てきていた。

「どう？　今のも僕がそこを斬りに行かつて読んでたんでしょ？　でも、僕の行動が読めていても身体が僕のスピードについてこれないでしょ？　それが君の弱点だよ。君はその能力に頼りすぎている。心を読むことに慣れすぎて身体が言うことを聞かないんだよ」

腹部に斬撃を受けた翔は、少しよろめいたが傷口を押さえながら立ち上がる。

「そうでなくっちゃ」

そして、再び悠は翔目掛けて刀を振るう。

「僕が、ここまで強くなれたのは君のおかげだよ。ずっと考えていたんだ。どうやって君を殺してやろうかって。そして辿りついた答えがこれだった。君が僕の母さんをナイフで刺したように、僕も君を刃物で刺して殺してやろうって！　でもすぐには死なせない。いたぶっていたぶって、もうこれ以上はないほどに肉体的にも精神的にも追い詰めてから殺してやろうと思うんだっ！」

再び激しい衝撃で翔は身体を飛ばされた。今度はそれを逃さぬように悠も飛ぶ。翔は地面へと仰向けに倒れる。その上から悠は刀を翔の顔面へと突き刺す。そして刀は翔の顔スレスレを通り地面へと突き刺さった。

「どうだい？ 翔。命を弄ばれる感覚は。僕がこの刀を少し横にずらすだけで君は死に至る。怖いだろ？ 母さんはそんな死の恐怖を君に与えられたんだ。君にもそれ同様の、いやそれ以上の恐怖を味あわせてやるよ」

悠の眼は焦点があつていない。もはや、翔を目の前にしてただ暴れるだけの怪物に等しかった。その眼には輝きはなく、ただ復讐を考え、殺すことだけを目的としていた。そして、それが今まさに達成されようとしていることに悠は心から歓喜した。

「……死ぬことは怖くはない。俺は、あの日から死を望んで生きてきたんだから」

「やつと喋ったね。口も利けないくらい恐怖してるのかと思ったよ」

「俺は、いままで犯罪者として、この世界を闇に染めるために人を殺し、テロなどの犯罪に手を染め、世界を恐怖の渦に巻き込んできた。その中には、家族がいたものもいただろう。俺がお前にしてしまったことを俺は何度も繰り返した。その過ちと、罪は一生消えないだろう」

「よく分かってるじゃないか。そんなお前はもちろん死刑だ。僕が世界に変わって裁いてやるよ」

「……だけど、俺は死ねない」

翔は、悠を押しつけた。悠はその際にバランスを崩したがすぐに体勢を立て直した。翔も立ち上がる。

「死ねないだと？ あれだけたくさんの罪を犯しておいて、たくさ

んの人間の命を奪ってにおいて自分の命がそんなに惜しいのか!!」

「……惜しいさ。人はみな違う。誰一人、変わりになるものなんていない。悠の代わりがないように、俺にも代わりはない。俺は、俺にしかできないことを見つけたんだ。世界でただ一人俺だけが出ること。俺は、それを実行する。だから、俺はまだ死ぬわけにはいかないんだ」

その言葉に、悠の心に変化が訪れた。これから嵐がやってくる前に静けさが訪れるように、悠の心も先ほどまで静けさを保っていた。しかし、それは全ての憎しみを爆発させるための布石。

「ふ、ふざけるな……ふざけるなあ！ お前は死ぬべきだ。お前はこの世界の害虫なんだよ。誰もお前を認めてやしない。お前は、今も昔も、ずっと孤独なんだ。生まれた瞬間から、死ぬべきだったんだあ！」

悠は、刀を振りかざし、翔に切りかかる。乱れうち、その怒りをその憎しみを全てその刀に込めて。そして、悠は渾身の力を込めて刀を振る。金属音が鳴り響くと共に、その刀は折れた。悠が斬りつけたのは翔ではなく、鉄鋼だったのだ。悠の力と鉄鋼の強度により刀が折れたのだ。

「こつちだ」

翔は、悠の背後にいた。悠の乱れた心が、翔の動きを捉え切れなかったのだ。

「もうやめよう。悠、こんなことをしてもなにも解決しない。俺もお前も誰も救われない」

「……解決しない？　なんでお前にそんなことが分かるんだ？」

悠は翔のほうを向かずに、背中越しに話をする。

「僕の心はお前の死なくして救われない。……殺してやる。殺してやる。ぶち殺してやるっ！」

悠は懷に手を忍ばせると、隠していた拳銃を手にとり、自分の身体を死角として翔目掛けてその引き金を引いた。翔は、悠の身体が死角となり、拳銃の存在に気がつくのが遅れてしまった。

孤児院では葵が翔の帰りを待ち、椅子に座ってテレビもなにもつけずにいた。すると、玄関のほうから物音と同時に葵を呼ぶ声が聞こえた。聞き覚えのある声に、葵は急いで玄関に向かう。

そこには息が途切れ、途切れとなっているみちこの姿があった。相当な距離を走ってきたのだろうか。なにかを話そうとしているが、息が切れうまく話せないようだ。

「みちこさん、無事だったんですか？」

「あ、葵さん。お願い。二人を止めてください。このままでは流さなくてもいい血を、失わなくてもいい命を失ってしまいます」

みちこは必死に葵に話しかける。葵もみちこの言っている言葉に

理解が出来ずにいた。

「どういうことですか？」

「悠君は、昔となにも変わっていないかった。昔のままの心優しい子のままでした。一度は私をさらい翔君をおびき寄せするようにし、孤児院の子供達を心配して私を返してくれました」

この時葵は思った。翔がここで待てといったわけ。悠もここで育ったのだから分かってると言ったわけ。翔は悠がみちこを解放しこの孤児院に返すことが分かっていたのだ。二人ともここで育ったから、ここの子供達がみちこのことをどれだけ大切にしているのか分かっていたから。

二人は互いに言わなくてもそれを分かっていた。

「お願いします。葵さん。私には悠君を止めることができなかった。二人を止められるのはあなただけです。二人を止めてください」

「みちこさん。教えてください。二人が向かった場所を」

葵は、みちこからその場所を聞くと、すぐにその場所へと足を走らせた。

第二十話 闘い（後書き）

読んで頂きありがとうございます。なんか内容が少年誌っぽくなつてしまいました。すいません。それも作品の一部として受け止めてください。残すところ後二話です。

第二十一話 決着

二人が争った倉庫は、元々の朽ち果てた状態と共に、二人の争いでさらに痛んでいた。そんな倉庫のドアがゆっくりと開いた。そこにはドアに寄りかかり、息を切らしながら立っている葵の姿があった。

そして、葵の目には二人の男の姿が見えた。一方は立ち、一方は倒れている。葵はその人物の姿を確認しようと、目を細める。そこに立っていたのは悠だった。手には銃を持っている。そして、地面に倒れ、血を流しているのは翔だった。

「おや？ 君も来たのかい？ ちょうどいい所にきたね。今からこの化け物に止めを刺すところだよ」

悠はゆっくりと葵のほうを見ながら話しかける。

「もう、やめて。こんなことをしてなんになるの。空しいだけじゃない。復讐なんて」

葵は少し涙目だ。悠は葵のほうに銃を向けた。

「言つたろ。そんな月並みな台詞は聞き飽きたつて。……君も不運な人間だね。この化け物と出会ってしまったばかりに不幸になる。こいつと出会った人はみな不幸になるんだ。こいつの両親も、こいつに殺された数多くの人も、君も、そして、僕も」

悠は言葉を発しながらゆっくりと葵のほうへと歩みを進める。銃を相変わらず葵のほうに向けながら。

「……そんなことないよ。少なくともあたしも、あたしのおじいちゃんも幸せになれた。彼と出会ってなければあたしは一生、背負い込むことになっていた。彼が助けてくれた。だから、少しも不幸じゃない。あなたも同じよ。悠君」

「……同じ？」

悠の足は停まった。だが銃は相変わらず葵に向けられている。

「あなたも幸せなはずよ。あの時、彼が助けてくれなかったらあなたはここにはいない。知ってるんでしょ？ 彼の心を垣間見る能力も。彼の心の本当のやさしさも」

その瞬間。葵の足元に銃弾が数発飛んできた。葵はそれに驚き、腰を抜かしそうになったが、気を抜くことなく必死に立っていた。

「幸せ？ 助けてくれた？ なにも知らない女が知った風な口を聞かないでくれよ」

「なにも知らないよ。その場にいなかったし、あたしはただ聞いただけ。翔のように心を垣間見る能力もないし、あなたの気持ちもよく分からない。でもあなたはあたし以上に翔のことが分かっているはずでしょ？ あなたは翔がこの世で唯一認めた存在。たった一人の親友。なのになのに……どうしてあの時、翔の気持ちを少しも分かってあげられなかったのよっ！！」

その言葉に悠は少し反応した。葵も悠の目を見ながら話しかける。

「あなたは翔の気持ちを本当に理解できたたった一人の人間だった

のに。翔はあなたに感謝していた。闇から救ってくれた親友だもの。翔もあなたと同じ親に捨てられ孤独に育った人間。あなたの親が現れて彼もあなたに幸せになってほしいと思っていたはずよ。だからこそ、あなたが彼を理解してあげなくちゃいけなかったんじゃない」

その瞬間激しい銃声と共に、葵の肩に激痛が走った。葵はそのあまりの激痛に地面へと倒れてしまった。肩から、血が服の上に滲み出てくる。

「翔が寂しくないように、お前も一緒にあの世に送ってやるよ」

そして、悠は再び引き金に指をかける。そして、それを引いた。そして、その弾は左の肩へと着弾した。しかし、弾を受けたのは葵ではない。それは翔だった。

「し、翔！」

葵は驚いた。倒れていた翔が今自分の身体をはって助けてくれたからだ。悠も驚いていた。とても動ける身体ではなかったはずの翔が起きて目の前にいるのだから。

「馬鹿な。動けるはずがない」

翔は、俯いている。

「そうか。体力も化け物並みってわけか。少し驚いたよ。でも、すぐに始末してやるよ」

悠は銃を翔に向けて撃とうとした。しかし、それは翔によって阻まれた。翔の手が銃を握る悠の手を掴み、銃を地面に落としたのだ。

「ぐつ、離せ化け物！ 僕に障るな！」

悠は必死に翔の握る手を取り払おうとした。しかし、翔の手はビクともしない。

「もう、やめよう。悠。これ以上、憎しみを増やしてどうするんだ」

「憎しみを増やす？ 僕の心はもうすでに君への憎しみでいっぱいだよ。これ以上は増えることなんてない」

「俺に嘘は通じない。分かってるだろ？ 心を垣間見る能力に死角はない」

その言葉に葵は驚いた。

「悠。お前は生きる意味がほしかっただけなんだろう？ そのために俺への復讐を目的とした。俺への憎しみなんかとうの昔になくなっている」

「違う。……違う。僕は」

「もう寝ろ。悠」

その瞬間、翔の拳が悠の腹部へ一撃を加えた。その痛みにより、悠は一瞬にして意識を失った。倒れる悠を翔はその手でしっかりと抱きしめる。

葵はその様子をしっかりと見ていた。

第二十一話 決着（後書き）

読んでいただきありがとうございます。ここまで長かったです、
いよいよ次回、最終話です。次回は最終話と＋を一挙掲載します。
お楽しみに。

第二十二話 それぞれの道

葵と翔は気を失った悠を連れて孤児院へと戻ってきた。孤児院ではみちこが三人の帰りを待っていた。悠はみちこの意向で、孤児院で療養することとなった。疲れ果てたその人生とその心を癒すために。

翔と葵は、孤児院の庭にあるベンチに座っていた。

「ねえ、翔。悠はあなたに憎しみを抱いていないって本当？」

「ああ、あいつは知ったんだよ。全ての真実を。あの後、悠はこの孤児院から姿を消した。その後で母親が持っていた所有物から住所を割り出し、母親の住んでいたところしばらく住んでいたんだ。そして、そこに現れたのは、悠を引き取りに来たやつらだった。悠の母親は生活に困っていた。それで悠を売り飛ばし大金を得ようとしていたんだ」

「じゃあ、結局は翔の言っていたことが本当だって知ったのね」

「ああ、だけど、孤児院を出てしまった悠は行き場も、目的もなくした。だから、生きる目的として俺を選んだんだ。俺を復讐の対象とすることで生きる意味を手に入れた。あいつも俺と同じだ。俺は幼い頃から見てきた人間の心の闇の部分を知って、この世界に命を受けたことへの復讐の対象に全世界を選んだ。すぐ近くにいたマミ―やお前のようなやつらの存在に見て見ぬふりをしていたんだ。でも、今なら分かるよ。人間は光と闇の両方を併せ持つて始めて心ある人間となるんだ。良いだけの人間もいなければ、悪いだけの人間もない」

翔は、澄んだ表情で言った。その表情を葵は見逃さなかった。いままでのすました表情とは違う。しっかりとした目的を得て、これからの人生を必死に生きようとする人間の表情だ。

「あたしも気がついてた。翔のこと。あなたは間違いなく人間だよ。心を垣間見る能力があるうとなかろうと、あなたは純粋で綺麗な心を持った一人の人間」

葵は気がついてた。翔の心はとても素直で、純粋なまるで生まれたての赤ん坊のような心を持っていることに。そして、その心を持っているがために、傷つきやすく、治りにくい。けど、その誰にも負けない純粋な心は、みなをいつかきつと幸せにする。

もし、神様がいるのだとしたら、きっと神様はそんな純粋な心を持つ翔だからこそ、『心を垣間見る能力』を与えたのだろう。この能力は呪われた悪魔の力なんかじゃない。人を幸せに出来る選ばれた力なのだ。純粋な心を持つ翔だからこそ、使うことを許される。

そして、翔の心はすでに救われていることもその表情から見とれた。

翔はゆっくりと立ち上がると、その足を前に進めた。

「翔、これからどうするの？」

「俺にしか出来ないことを見つけた。俺はこれからそれを実行するつもりだ」

翔は振り返ることなく答える。

「それは、世界への罪滅ぼし？」

「罪滅ぼしなんかじゃないさ。俺がやってきたことは、一生をかけても償えない。だから、これは俺の人生の目的だ。結局のところ俺がそうするよりも遥か前から世界は闇で染まっている。これは決して変えることの出来ないことだ。でも、それでも人は闇から光へと変わることが出来る。だから、俺はその手助けをしようと思う。お前が俺を変えてくれたように」

翔はゆっくりと葵のほうを見る。

「だから言いたかった。……ありがとう」

それは、葵が初めて見た翔が始めて人に見せた笑顔だった。そして、翔は一人その場から姿を消した。自在に翔ぶことのできるその足を生かして。

そして、時は流れた。

葵は介護士としての夢を果たして介護施設でお年寄り達を相手して仕事をしていた。葵は良く人の心を理解できる人だと言われるようになっていた。葵は別に意識しているわけではないのだが、自然と心がそうなるのだ。それはかつて得た経験のおかげ。言葉をきちんと発することの出来ない人達にとって人の気持ちを理解できる葵がどれだけ大切かが分かる職場。それはきっと葵にとっての天職だった。

今日は、仕事が休みなので葵は久しぶりにあの孤児院へと向かっていた。電車で揺られ、緑溢れる外の景色を眺めながら孤児院についたらどんな話をしようかと考えていた。

葵は風の噂でいろいろな情報を聞いていた。

その後、みちこは悠と共に孤児院をやっているらしい。みちこは相変わらず子供達の母親的存在であり、悠は、元孤児院にいただけあって子供達の気持ちをよく理解できるお兄さんの存在らしい。その噂を確かめるため、今から孤児院に向かおうというのだ。

葵は、過去にあったいろいろなことを思い出し、とても胸を踊らせていた。とても天気がいい。あの時のことを思い出す。病院を退院するときのような陽気だ。

それと、葵はとっておきの情報も持っていた。あの柊翔のことだ。

それは風の噂。不思議な力を持った人間がいるらしい。その人間は、病気などで話せなくなった人の変わりに心を読みその人の心を代弁することが出来るというのだ。

翔が、葵の祖父にやったように。

これは間違いなく翔のことだろう。翔が見つけた自分にしか出来ないこと。それは心を垣間見ること。世界を闇に変えるハンスではなく。世界を光に変える、柊翔として。

今日も、空は澄み渡り、鳥が飛ぶ。自然な風が吹きぬけ、大地は緑で溢れている。

そんな世界にある駅を葵は降りて、目的の場所へと向かう。その足取りはとても軽い。

世界は人の心で出来ている。どれだけ最先端の技術が開発されようとどれだけ文明が進もうと、どれだけ時が流れてもそれは決して変わらない。人の心次第で、世界は闇にも光にも染まる。それを忘れてはいけない。

それが、人の心が記した世界へのメッセージ。

了

第二十二話 それぞれの道（後書き）

読んで頂きありがとうございます。今回で『心を垣間見る者』は最終回です。最後まで読んでくださり本当にありがとうございます。感想や評価などをいただけると非常に幸いです。それではまた次回作でお会いしましょう。

+ (後記) (前書き)

今回の話は、本編とは関係のない後記です。本編であった様々な謎やその後などを記しています。

+
(後記)

葵と翔の物語『心を垣間見る者』を最後まで読んでいただきありがとうございました。

この物語は、僕自身の祖父が亡くなった時に思い浮かんだものです。僕の祖父は肺がんで最後は話すことも出来なくなりそのまま亡くなりました。その時思いました。もし人の心を読むことが出来たのなら祖父が最後に言いたい言葉も分かるのにと。そうして出来たのが二部の葵の祖父のエピソードです。

他のエピソードはそれを基盤として後付されたものです。

人の心を垣間見ることが出来る能力は、いわば人の心を読む能力。人が心で考えていること、思っていることが全て問答無用で伝わってきます。翔が心を読むことを拒否はできません。例えば望まなくても人の心が伝わってくるのです。

特殊な能力としては最もありきたりなものですが、それだけに理解されやすく、分かりやすいと思ひあえてこういう能力での物語にしました。

翔は葵の心を読むことができないと言っていたがそれは本当か？

正確には心を読めてはいたが、読まないようにしていたのが正しいようです。翔はたくさんの人間の心を目の当たりにしてきました。

そんな中で出会った葵という女性は翔にとって、いままで出会った人間の中で特別な心を感じたのだと思います。だから、翔は、葵の心を読んでもそれを出来るだけ頭に入れないように努力していたのだと思います。普通の人間のように、口から出た言葉だけを信じて

なぜいつも都合良く翔は葵の前に現れたのか？

これは、最初、翔が葵に出会った時言っていた『興味を持った』の言葉によるものだと思います。翔は葵を観察していたのです。だから、葵が翔を必要としている時、いつでも翔は葵のそばにいたんです。なぜ翔が葵が翔を必要としていると分かったのかは、もちろん心を垣間見る能力のおかげです。実は、葵が事故に遭った時、すぐに助け出して応急手当をし、救急隊を呼んだのは翔だったのです。

孤児院のみんなは名前だけなのになぜ翔にだけ『柊』という名前があるのか？

柊という植物を知っていますか？ 柊はトゲトゲした葉を持った植物なのですが、それは翔の人生そのものです。他の誰も寄せ付けないその尖った人生。しかし柊は、季節を重ねるとそのトゲトゲした部分は無くなり、丸くなるようです。翔が葵と出会ってしままでの尖った人を傷つける人生ではなく、丸くやさしい人生に変わるように。そういう願いがあり、柊という名前を翔にだけ付けました。そして出来たのが柊翔だったのです。

葵（翔）は柊翔（葵）に恋心を抱いてはいなかったのか？

これは、お互いにそういうことはなかったのだと思います。というのも、葵から翔には少しばかりそういう心もあったのですが、葵は翔に対して男とみるよりも一人の人間として信頼していたため、それ以上の関係には発展しなかったのですね。翔のほうは、葵に対してそういう感情はまったくなかったのだと思います。

悠の本当の目的は結局なんだったのか？

悠の本当の目的は本編であつたように、翔に復讐することだったようです。ただそれは本当の目的であり仮の目的でもあつたようです。悠の意識の中に、目的もなく生きている人間は、生きていても死んでいるのと同じのようになにかしら生きる目的がほしかったのだと思います。しかし、親友であつた翔を裏切り、傷つけてしまった。もう引き返すことは出来ない。だから翔を復讐の対象とすることで目的と共に自分の心を守つたのです。

悠は新たな目的を得たのか？

悠は孤児院で働くことで新たな目的を得たようです。悠もまた辛い過去を持っています。だからこそ今、孤児院にいる子供達の気持ちをしっかりと理解できるお兄さんの存在になつているようです。おそらく悠の新たな目的は、自分のような人間を出さないということだと思えます。親がいないことを苦に思うのではなく、自分の人生を満足のいくまで笑顔で過ごしてほしい。そういう想いを持つ

て孤児院でしっかりと働いているのだと思います。

その後、翔と葵は会うことがあったのか？

実は、翔と葵はこの物語の数十年後、再会することになります。初老となった二人が再会したとき、翔の心は実に人間らしくなっていたようです。いろんなことに喜び、笑い、怒り、悲しむ。翔はいままであった様々な出来事を葵に話したそうです。葵も翔にいろいろなことを話しました。

翔は結局、幸せになれたのですか？

あなたは どう思います？ この物語の結末はひとつの答えだと思っています。きっと行動一つでいろいろな結末が出来ると思います。翔の生き方、葵の生き方、悠の生き方。人は人の数だけ生き方があるのだと思います。その生き方が幸せかどうか判断するのはその生き方を選択した人次第なのです。

ただ、僕はこの生き方が翔にとっては一番幸せな生き方だと思い、書きました。世界的犯罪者として世界から追われる過去を持ちながら、それすべてを受け入れて自分が最も幸せに生きることのできる生き方をしていると僕は思います。

最後に。

この物語を書きながら人の心についていろいろと考えました。本編の中にはいくつか物語とは関係のない人の心について書かれている部分があります。その時に思いながら書いたのでまとまっていなかったり、うまく表現できていなかったりしているのかも知れませんが、その時に思った心を書きました。今はまた変化しているかもしれないですが。

僕も、そして、これを読んでくれる方もみな心を持った人間で、様々な感情を持って生活をしているのだと思います。嬉しいこともあれば、嫌なこともある。意見が合わなくて対立したりする時もある、共感できるような出来事もあり、人生にはいろいろな心があるのだと思います。その心をどうするかはあなた次第。

人は心を持っています。実に多様な感情を持っています。これは、生物至上稀に見る特別なことです。あなたが心を持っている目的を見つけてください。なぜ人は美しいと感ずることが出来るのか。この感情は人へのみ与えられた特別な感情です。考えてください。

自分が生きている意味。目的。どんな小さなことでも必ずあるはずです。

好きな人を幸せにしたい。お金持ちになりたい。親孝行をしたい。社会に貢献したい。人の命を救いたい。動物を助けたい。知識をつけたい。おいしいものを食べたい。人を笑わせたい。上手になりたい。誰にも負けたくない。旅をしたい。

他にもたくさんあると思います。それらのことは全て心に刻まれます。心が豊かになればきっと人生は楽しくなります。単なる綺麗

ごとだと言つ人もいるけども僕はそう思ってます。だからこそ、この物語を読んで頂いた全ての人に感謝します。そして出来ればそれらを考えながらも一度この物語を読んでもください。きっといろいろなものが見えてくると信じています。

人の心は永遠に未来へと繋がっていく。

それでは次回作でまたお会いしましょう。最後まで読んでいただいて本当にありがとうございました。

+ (後記) (後書き)

読んでいただきありがとうございます。これにて本当の最後でございます。この物語があなたの記憶の中の一部に残ってくれることを願っています。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6159c/>

心を垣間見る者

2010年10月10日05時33分発行